

**土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書**

豊田

5 万分の 1

平成 24 年 3 月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「豊田」

目次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
1.3	調査実施体制	2
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	8
3.1	地形概説	8
3.2	地形細説	11
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	16
3.4	地形と災害及び保全との関係	18
4	土地利用の変遷の概要	19
4.1	過去の土地利用状況の概要	19
4.2	土地利用の変遷の概要	23
5	調査地域の災害履歴概要	29
5.1	災害履歴概説	29
5.2	災害履歴詳説	29
6	調査成果図の見方・使い方	33
6.1	地形分類図	33
6.2	土地利用分類図	35
6.3	災害履歴図	36
6.4	成果図面の使い方	37
7	引用資料及び参考文献	39
7.1	引用資料	39
7.2	参考文献	42

資料

災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「豊田」図幅の調査成果は、中部圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の最初の成果として、平成23年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

1 調査の概要

1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

(1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

(2) 本調査による調査成果

① 土地状況変遷情報

i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあっては改変前の自然地形を復元し分類している。

ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

iii. 土地利用分類図（2時期分）

明治・大正期（現在から概ね100年前）と昭和40年代（同概ね50年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

② 災害履歴情報

i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集したものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

1.3 調査実施体制

(1) 地区調査委員会（敬称略・順不同）

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授(名古屋大学名誉教授)

委員

(学識経験者)

藤本 潔 南山大学 総合政策学部 教授

堀 和明 名古屋大学 大学院環境学研究所 准教授

(関係県・政令市)

愛知県 地域振興部 土地水資源課

岐阜県 都市建築部 都市政策課

名古屋市 緑政土木局 企画経理課

(2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 土地政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査及び土地利用履歴分類調査

株式会社東京地図研究社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

2 調査地域の概要

2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「豊田」の全域、北緯 $35^{\circ} 00' \sim 10'$ 、東経 $137^{\circ} 00' \sim 137^{\circ} 15'$ （座標は日本測地系）、愛知県中央部やや北側に位置する面積約 421.50km^2 の範囲である。図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

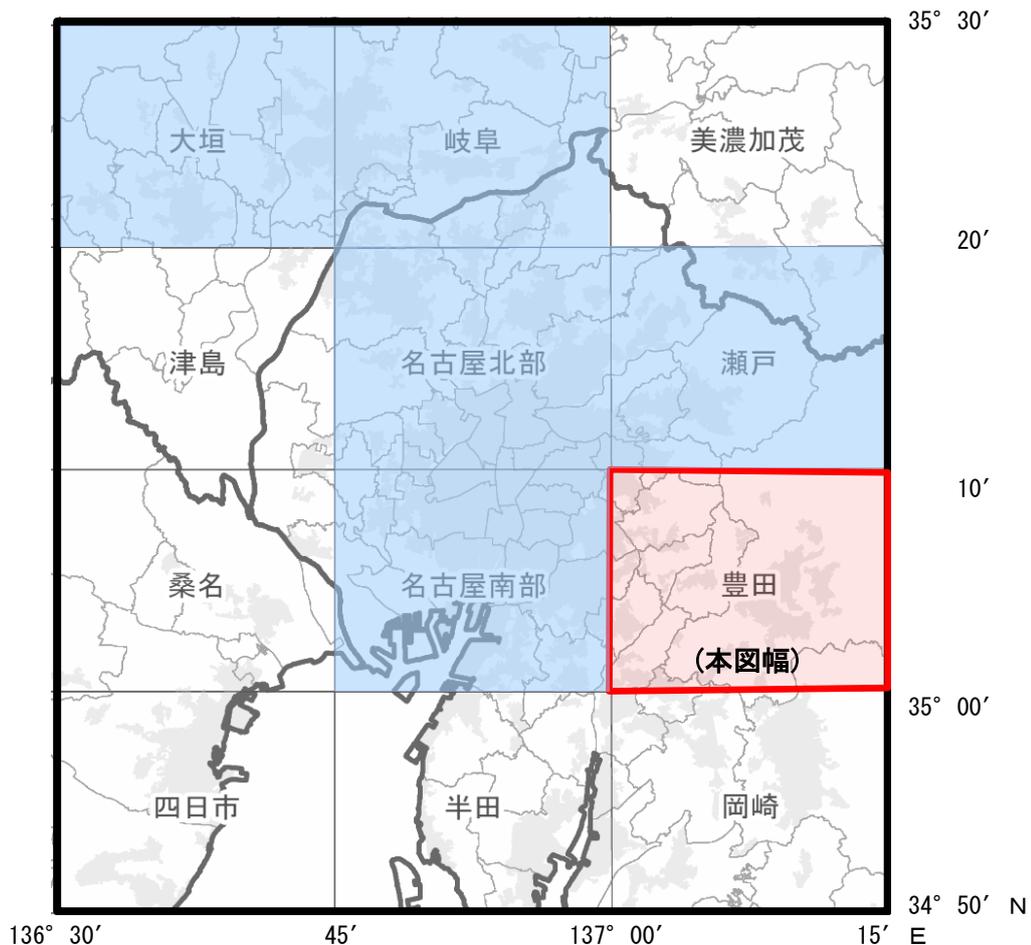


図 2-1 調査位置図

2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、愛知県の 11 市 1 町（名古屋市、岡崎市、刈谷市、豊田市、安城市、大府市、知立市、豊明市、日進市、みよし市、長久手市、愛知郡東郷町）である（図 2-2、表 2-1）。

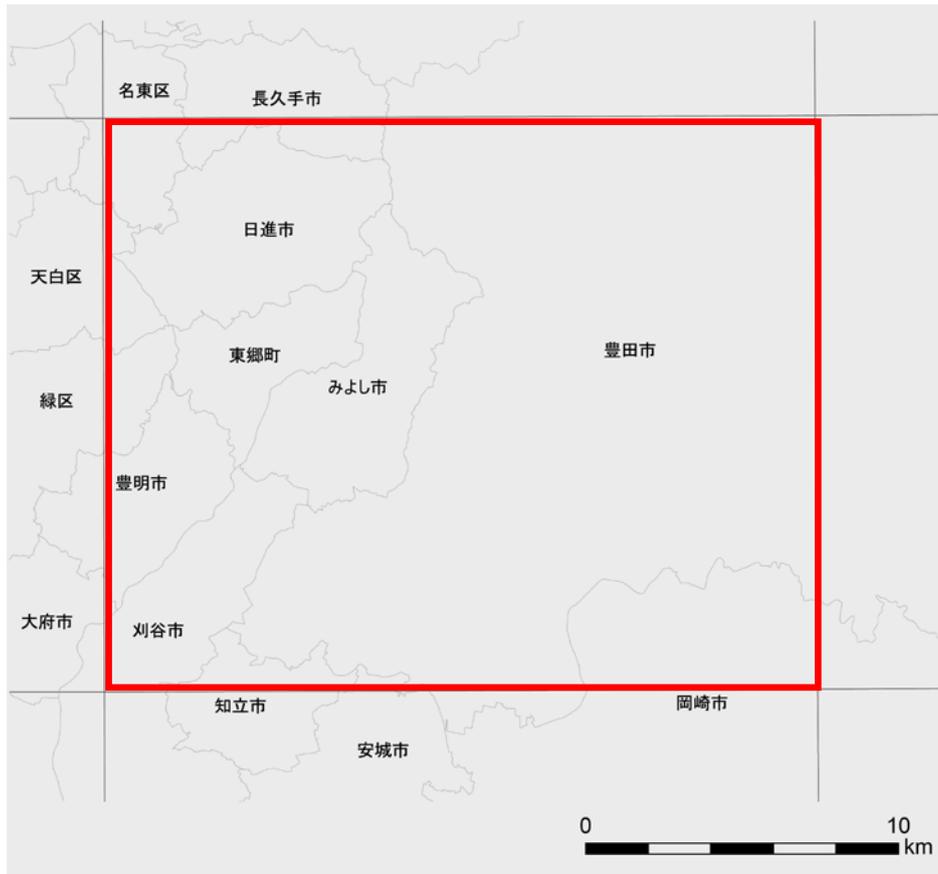


图 2-2 関係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
	ha	ha	世帯	人
愛知県				
名古屋市				
緑区	639	*3,784	87,672	229,592
名東区	808	*1,944	71,894	161,012
天白区	518	2,162	70,574	158,793
岡崎市	1,965	38,724	138,255	372,357
刈谷市	2,216	5,045	58,917	145,781
豊田市	23,523	91,847	162,065	421,487
安城市	97	8,601	66,707	178,691
大府市	34	3,368	33,484	85,249
知立市	594	1,634	27,882	68,398
豊明市	1,755	*2,318	26,872	69,745
日進市	3,491	3,490	33,418	84,237
みよし市	3,220	3,211	21,054	60,098
長久手市	657	*2,154	22,240	52,022
愛知郡東郷町	1,803	1,803	14,935	41,851
計	42,150	170,085	835,969	2,129,313

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2. 行政面積は国土地理院「平成 23 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 23 年 10 月 1 日現在）による。

*印は、境界未定のため総務省「全国市町村要覧平成 22 年版」記載の便宜上の概算数値を参考値とした。

3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口速報集計結果による。

2.3 地域特性

(1) 沿革

本図幅の地域は、旧尾張国、三河国に属し、明治4（1871）年廃藩置県により名古屋県、額田県が設置された。このうち、名古屋県は、明治5年4月には名称が愛知県と改められ、同年11月には額田県（旧三河と旧尾張の知多郡）を廃止して愛知県の管轄に含め、現在の愛知県の範囲となった。

本図幅の地域は、戦国時代には、今川氏、織田氏、松平氏（後の徳川氏）の3者の接点ということもあって絶えず戦いが繰り返された地域であった。明治期に入ってから、蚕糸、綿糸などの産業が栄えるとともに、矢作川や巴川などの水運を利用した貯木場としても重要な産業拠点となっていた。昭和期に入ってから、刈谷の豊田自動織機製作所が新しく設置した自動車製造部の工場誘致をはかり、昭和13（1938）年トヨタ自動車工業株式会社（現在のトヨタ自動車株式会社）の挙母工場が完成し、クルマのまち豊田としての第一歩を踏み出した。現在では、トヨタ自動車株式会社が本社をおく企業城下町として発展を続けている。

本図幅の交通網をみると、鉄道は現在の名鉄三河線が大正期に整備され豊田市街と知立方面とを結んでいるほか、名鉄豊田線が昭和54（1979）年に開業し、名古屋市営地下鉄との相互乗り入れにより名古屋市内への通勤の足として利用されている。

また、高速道路網では、東名自動車道が図幅北西部から南部へと通っているほか、東海環状道が図幅南東部を通っており、交通利便性の高い地域である。図幅内にはトヨタ自動車関連の工場が多いことから、貨物輸送等の利便性向上に寄与している。

また、本図幅西部の豊田市と名古屋市に挟まれた地域では、丘陵地での宅地化が進み、市街地の拡大が進んでいる。

(2) 気候

豊田の気候を1981～2010年の平年値（表2-2）からみると、年平均気温は14.8℃、最寒月（1月）の日最低気温の月平均は-1.7℃、最暖月（8月）の日最高気温の月平均は32.7℃となり、都心部に比べやや年較差の大きい内陸性の気候の特徴がみられる。

年降水量は1,451.4mmで、月降水量は3月から10月にかけて100mm/月を超え、秋霖期の9月に212.0mmで極大となる。月降水量の極小は12月の43.2mm/月で、12月、1月の降雨は50mm/月を下回る。1月から3月は北西風の頻度が最も高いが、それ以外には北東風が卓越し、風速は3、4月に極大となるが、月ごとの変動は大きくない。また、年間日照時間は2,056.2時間で、梅雨期の6月に極小、夏期の8月に極大となり、各月とも140時間/月を下回ることはない。

表 2-2 豊田の気候表（1981～2010 年の平年値）

要素	降水量	気温			風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1981 ～2010	1987 ～2010
資料年数	30	30	30	30	30	30	24
1 月	44.0	3.3	8.9	-1.7	1.3	北西	159.4
2 月	59.2	4.1	9.9	-1.3	1.4	北西	167.4
3 月	112.1	7.8	13.7	1.9	1.5	北西	188.8
4 月	116.8	13.4	19.8	7.2	1.5	北東	197.5
5 月	149.1	17.9	24.1	12.2	1.3	北東	184.9
6 月	202.9	21.9	27.2	17.3	1.1	北東	142.8
7 月	187.1	25.6	30.9	21.5	1.1	北東	159.8
8 月	115.7	26.8	32.7	22.4	1.3	北東	202.3
9 月	212.0	23.2	28.8	19.0	1.1	北東	154.5
10 月	120.3	16.9	22.9	12.1	1.0	北東	164.6
11 月	71.9	11.0	17.1	5.9	1.1	北東	163.0
12 月	43.2	5.7	11.6	0.6	1.2	北東	167.8
年	1,451.4	14.8	20.6	9.8	1.3	北東	2,056.2

「日本気候表（気象庁、2011）」による豊田気象観測所（アメダス）の平年値。
統計期間は 1981～2010 年の 30 年間。但し日照時間は、1987～2010 年の 24 年間。

(3) 地形及び地質の概要

本図幅の範囲は、愛知県のほぼ中央部に位置し、主に丘陵状の山地・台地からなっている。

地形についてみると、東には三河高原西縁の低い山地が連なり、北には猿投山地とそれに続く丘陵地が広がり、残りの範囲の大部分は丘陵状の山地・台地で占められている。また、中央部の台地には、矢作川やその他中小河川に沿って開析された幅の狭い低地が樹枝状に入り込んでいる。本図幅内は、名古屋市への通勤圏であることや、トヨタ自動車の本社が立地することなどから、丘陵状山地は広い範囲で人為的に改変され、大規模な住宅団地・工業地として利用されている。

地質についてみると、本図幅東部から北部にかけての山地は、花崗岩や花崗閃緑岩といった花崗岩類で、限られた一部に変成岩類が露出している。花崗岩類は、ところによっては著しい風化作用を受け、真砂土化している。これらの地層は西方または西南方へ向かって低下して西域の地下に潜在し、この地域の基盤を構成している。

矢作川以西の台地・谷底低地は、鮮新世以降の半固結の堆積物からなり、最も表層の沖積面は主に礫・砂・粘土で構成されている。

(5 万分の 1 土地分類基本調査「豊田」説明書による)。

3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

3.1 地形概説

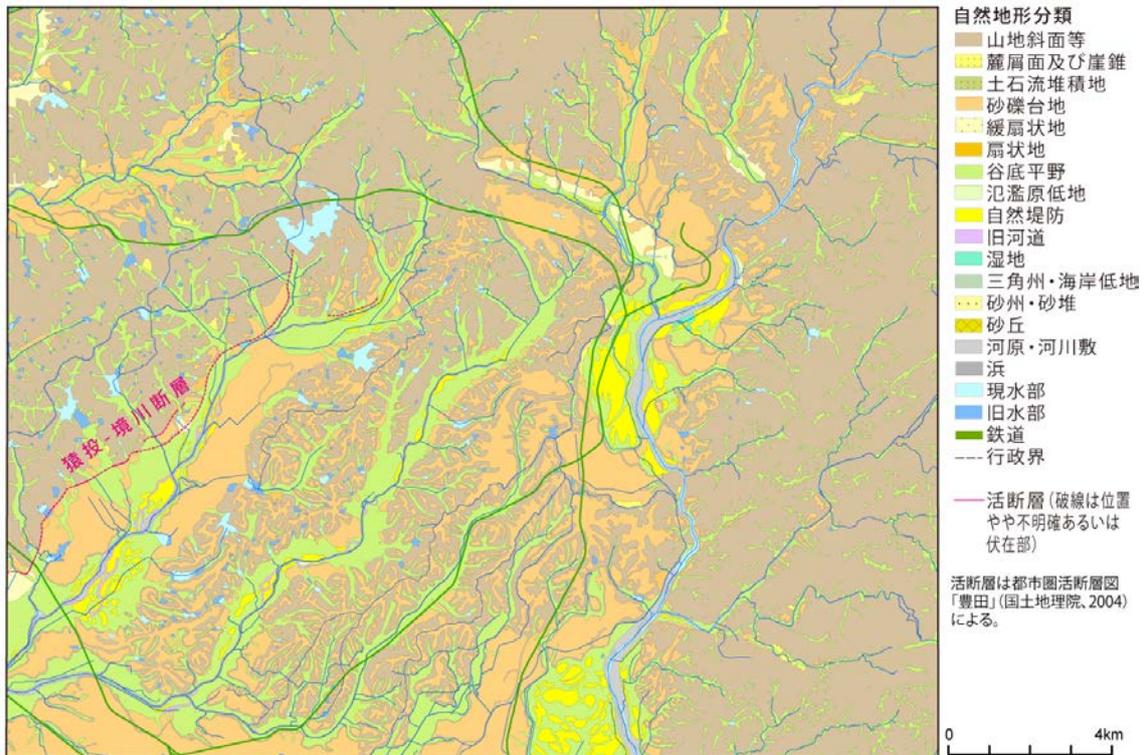


図 3-1 豊田地域の自然地形分類図

本図幅の自然地形分類図をみると、低地が少なく山地斜面等が全域に広がる地域である(図 3-1)。矢作川を境にして東側には三河高原に属する山地が、西側には東山丘陵や豊明丘陵などの丘陵地が、豊田から南へは西三河台地が広がり、それらを開析する中小河川が東北から南西方向へ流下している。

山地は東部の西三河山地と北側から張り出す猿投山山地があるが、両者はいずれも三河高原の一部である。三河高原は段戸山(愛知県設楽町、標高 1152m)を最高地点として、木曾山脈の南西に広がる非火山の高原状の山地である。標高 1100~100mの高原全域にわたって侵食小起伏面が発達し、隆起準平原の典型地として知られる(太田ほか: 1963、森山: 1987、須貝: 1990 など)。三河高原の南縁は中央構造線によって限られ、領家帯の花こう岩類や変成岩が分布し、古くから良質な石材として切り出されてきたが、これらの花こう岩類は深層風化が進んで脆くなっている地域もある。

本図幅の西側は**丘陵地**である。東山丘陵と豊明丘陵、東側には猿投山山地と西三河山地に挟まれるように分布する藤岡・乙部丘陵がある。主に鮮新統の湖生層である瀬戸層群からなり、名古屋市郊外の丘陵をつくる東海層群及び知多半島をつくる常滑層群に対応する。瀬戸層群は下部粘土層の瀬戸陶土層を上部砂礫層の矢田川累層が覆い、瀬戸陶土層は窯業用陶土として利用されている。丘陵背面は藤岡面と呼ばれ、矢田川類層の堆積原面を残す面と考えられている(町田ほか、1962)。

山地や丘陵地内には小規模な集落がみられるほか、工業団地や住宅地、大学、ゴルフ場などの人工平坦地が急増している。

台地は、矢作川右岸と境川とに挟まれた西三河台地が南方へ大きく発達し、その延長は三河湾沿岸まで続く。台地には砂礫質の高位、上位、中位、下位の各段丘面が認められ、古いものから三好面、拳母面、碧海面、越戸面と呼ばれる（町田ほか、1962；経済企画庁、1972）。表 3-1 には、本地域および周辺地域の地形面対比を示した。高位、上位面は丘陵状の地形を形成し、斜面は侵食されて谷底低地が樹枝状に深く入り込んでいる。一方、中位面は極めて平坦である。境川や天白川沿いにも中位面相当の段丘が発達するが、上流では谷底低地に埋没し、その境界は不明瞭である。また、境川沿いには、これらの段丘を変位させる猿投山-境川断層が確認されている（活断層研究会：1980、1991、地震調査研究推進本部地震調査委員会、2004 など）。

表 3-1 名古屋および周辺の地形面・地層との対比（愛知県、1986）

地域／地形面 分類・構成層	春日井		名古屋		矢作川流域	
	沖積面	沖積層	沖積面	南陽層、濃尾層	沖積面	沖積層
低位	鳥居末面	鳥居末礫層	(矢田川面)	(矢田川礫層)	籠川面(上・下2段)	(籠川層)
下位	小牧面	小牧礫層	大曾根面	大曾根礫層	越戸面	越戸層
中位	田楽面	田楽礫層	熱田面	熱田層	碧海面	碧海層
上位	高位段丘Ⅲ面	桃山礫層	覚王山面		拳母面	拳母層
	高位段丘Ⅱ面	桃花園礫層				
高位	高位段丘Ⅰ面	潮見坂礫層	八事面	八事層	三好面	三好層
	上末面	上末層		唐山層		
丘陵背面	猪高面	矢田川累層	猪高面	矢田川累層	藤岡面	矢田川累層
				(猪高部層)		

資料：春日井団研グループ（1971）、国土地理院（1968a）、坂本ほか（1984）、町田ほか（1962）

本図幅の段丘面には工場や住宅地造成、農地による人工平坦地が広がる。特にトヨタ自動車をはじめとする自動車製造業関連企業がこの台地に集中し、大規模な工業団地を形成する。

本図幅では狭長な低地が矢作川、逢妻女川、境川、天白川などの河川や、その支谷沿って分布する。矢作川は木曾山脈を発して三河高原を下刻し、三河湾へと注ぐ河川で、木曾山脈や三河高原の花こう岩帯で生産された土砂を中、下流域へと運搬し、小規模な盆地や河口周辺の三角州を形成する。豊田市の中心部では、盆地を形成し両岸に自然堤防を発達させる。豊田盆地より下流の豊田市上郷周辺においても、右岸には自然堤防が形成されている。

逢妻女川や境川、天白川に沿った低地においても、部分的に自然堤防や旧河道が認められる。現在の河道は直線状に改修されているが、旧版地形図を用いるとかつての流路を知ることができる（図 3-2）。また、丘陵地や台地内に樹枝状に延びる谷底低地の谷頭部には、ため池を伴う場合が多い。ただし、人工改変により消失している池も少なくない。

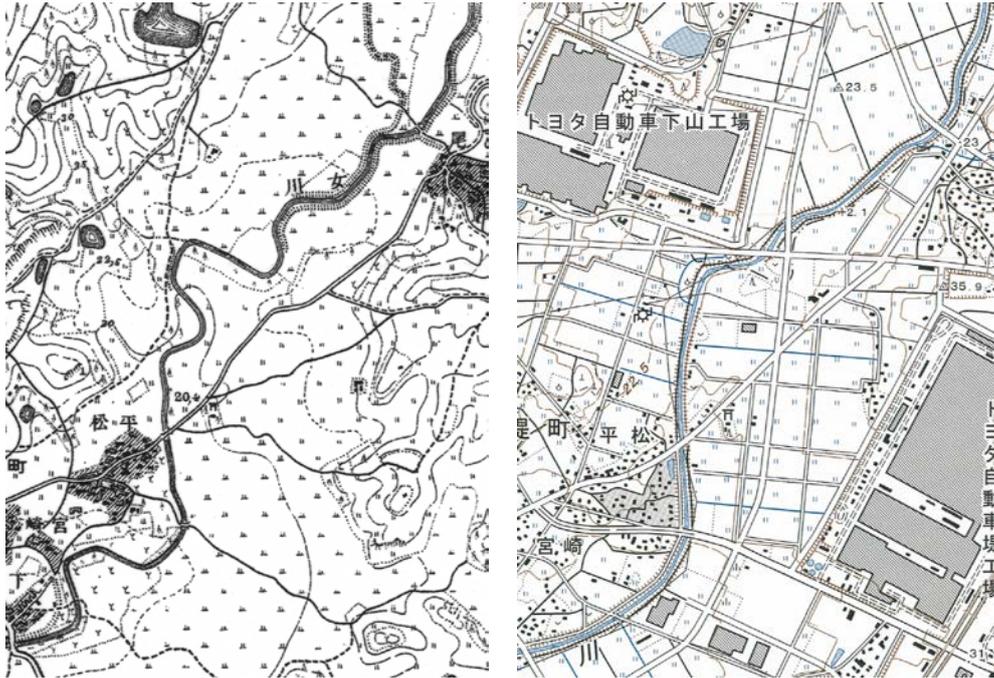


図 3-2 豊田市堤町平松周辺における逢妻女川の流路変遷

1:25000 地形図「知立」(左) 大正 9 年測図、(右) 平成 22 年更新 (部分、原寸)

大正期には逢妻女川が蛇行して流れているが、平成期には直線状に改修されている。丘陵にはトヨタ自動車下山工場と堤工場が、大正期にみられる谷やため池を埋めて建設されている。

本図幅では、豊田市街および知立市の一部に低地の盛土がみられる他に盛土地は少ない。本図幅における人工地形は、丘陵地および台地における切り盛り造成であるといえる。

表 3-2 は、自然地形を本図幅における市区町村ごとの面積の集計結果である。

表 3-2 本図幅内の市区町村別地形分類面積

(単位: km²)

区分	名古屋市				岡崎市	刈谷市	豊田市	安城市	大府市	知立市	豊明市	日進市	みよし市	長久手市	東郷町	合計	
	緑区	名東区	天白区	小計													
山地	山地斜面等	4.81	5.19	3.46	13.46	21.23	3.57	124.97	0.20	-	0.50	5.92	20.00	13.12	5.42	9.86	218.26
	麓斜面及び崖壁	-	0.06	-	0.06	0.09	-	0.74	-	-	-	0.02	0.39	0.07	-	0.05	1.42
	土石流堆積地	-	-	-	-	0.02	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	-	0.02
	山地 計	4.81	5.25	3.46	13.52	21.33	3.57	125.71	0.20	-	0.50	5.94	20.40	13.19	5.43	9.91	219.70
台地	砂礫台地(更新世段丘)	0.15	0.29	0.72	1.15	1.12	9.53	48.75	0.53	-	3.65	3.53	5.08	9.25	0.01	1.23	83.82
低地	緩傾斜地	-	0.71	0.05	0.77	-	-	1.62	-	0.00	-	0.39	0.21	-	-	0.10	3.08
	扇状地	-	0.00	0.05	0.06	-	0.02	0.57	-	-	0.04	0.50	0.15	-	0.11	1.44	
	谷底低地	1.15	1.39	0.68	3.22	4.30	6.41	44.53	0.23	0.29	1.51	5.67	6.60	7.82	0.88	5.26	86.73
	氾濫原低地	-	-	-	-	-	-	0.11	-	-	-	-	0.02	-	0.02	-	0.15
	自然堤防	-	-	-	-	0.31	0.91	6.32	-	0.01	0.03	0.45	0.06	0.31	-	0.10	8.50
	旧河道	-	0.02	0.00	0.02	-	0.18	0.21	-	-	0.08	0.14	0.02	0.10	-	0.02	0.75
	溜地	-	-	-	-	-	-	0.10	-	-	-	-	-	-	-	0.03	0.13
	河原・河川敷	0.00	-	0.04	0.05	0.95	0.61	2.87	0.01	0.02	0.15	0.34	0.51	0.27	0.00	0.25	5.61
	低地 計	1.16	2.12	0.84	4.11	5.17	8.12	56.32	0.24	0.33	1.74	7.02	7.92	8.65	0.89	5.87	106.38
水部	現水部	0.14	0.26	0.10	0.50	0.33	0.72	3.96	-	0.01	0.05	0.72	0.96	0.75	0.13	0.86	9.00
	旧水部	0.14	0.16	0.06	0.36	-	0.21	0.49	-	-	0.01	0.34	0.56	0.36	0.10	0.16	2.60
	水部 計	0.28	0.42	0.16	0.87	0.33	0.94	4.46	-	0.01	0.05	1.06	1.52	1.10	0.23	1.02	11.60
	合計	6.39	8.08	5.18	19.65	27.95	22.16	235.23	0.97	0.34	5.94	17.55	34.91	32.20	6.57	18.03	421.50

資料: 「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

3.2 地形細説

本図幅における地形地域区分は、20 万分の 1 土地分類基本調査（経済企画庁、1974）（国土庁、1975）、5 万分の 1 土地分類基本調査（地形分類図）（経済企画庁：1972、愛知県：1985、1986、岐阜県：1984、1986）、その他の文献（例えば町田・海津ほか、2006 等）を参考に、濃尾平野全域で統一の区分及び呼称とした（図 3-3）。

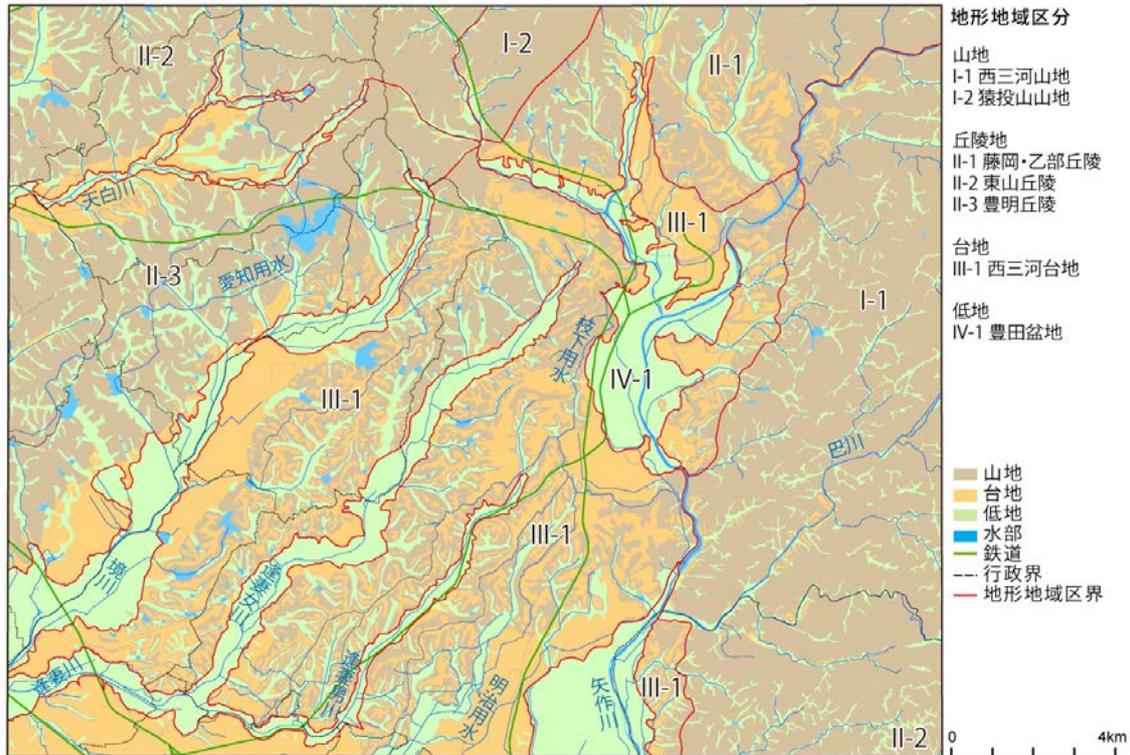


図 3-3 調査地域における地形地域区分

(1) 山地

本図幅における**西三河山地**（I-1）は三河高原の西縁、標高 280～100m の範囲にあり、全体的に東に向かって標高が高く、また、南部よりも北部の高度が高い。山頂高度には定高性があり、隆起準平原遺物とされる（須貝：1990、1995）。山地を形成する岩石は風化が進んだ花こう閃緑岩からなり、山地斜面は急勾配で、多くの崩壊地が認められる。勘八山から千鳥町周辺の山稜には矢田川累層の砂礫層が存在し、矢作川右岸の藤岡・乙部丘陵の背面、藤岡面に対比する（太田ほか、1963）。

北東端から南方へ流れる矢作川は峡谷となり、足助町から鍋田や岩倉を経て流下する矢作川支流の巴川は狭い谷底低地形を形成して、田として利用されている。山域では谷が複雑に発達し、谷底低地は東西方向あるいは北東-南西方向に延長する。多くの谷底低地で遷急点を持つことが特徴で、この遷急点から複数の時代の侵食基準面が推定されている（経済企画庁、1972）。

西三河山地の人工地形は、山地のゴルフ場開発によるものが目立つ。宅地等の造成は、豊田市街周辺の双美町、東山町、神池町、五ヶ丘、岩倉東にかけて、あるいは、岡崎市の北斗台、花園工業団地などがある。また、山地内に分布する花こう岩類は藤岡みかげ、猿投みかげ、拳母みかげなどと呼ばれ、墓石や建築材料として採石されて

きた（経済企画庁：1972、中江：1991）。人工地形にはこれらの採石地や、採石後の跡地利用の切り盛り造成地も含まれる。

猿投山山地（I-2）は猿投山（628.9m）を最高峰とする山地で、主体は北隣「瀬戸」図幅にあり、本図幅においては南端の標高200～150mの範囲が含まれている。猿投山山地は地形、地質共に西三河山地と同様で、三河高原の一部である。本図幅内では、名古屋広幡ゴルフ場および東名古屋ゴルフ場の改変地や、枝下町周辺の採石による切土地など、山麓の人工改変が著しい。

（2）丘陵地

藤岡・乙部丘陵（II-1）は、本図幅の北部の矢作川右岸に広がる標高100～200mほどの丘陵地である。丘陵の中心は北隣「瀬戸」図幅にあり、本図幅ではその南部が現れている。地質や地形は西三河山地と同様で、領家帯の花こう閃緑岩を基盤として、矢田川累層の砂礫層が堆積する。藤岡町周辺では、山頂に藤岡面に相当する小起伏面がみられる（経済企画庁、1972）。山地と同様に遷急点を持つ谷が発達するが、谷底低地を持つほど堆積作用がはたらく谷は少ない。乙部町周辺では山頂の小起伏面は認められず、丘陵地内に谷底低地が入りこみ、上流では勾配が大きくなる。

藤岡町では、トヨタ自動車広瀬工場を中心とする西広瀬工業団地やさなげ台団地などの人工平坦地（切り盛り造成地）や、採石場の大規模な切土地がある。御船町には産業廃棄物処分場があり、平成4（1992）年より廃棄物を受け入れ始め埋立てが進んでいる。乙部町周辺では乙女ヶ丘や保見ヶ丘の住宅造成地による人工平坦地があり、他にも森腰周辺の工場や中京大学のキャンパスにおいても切り盛り造成が行われている。

東山丘陵（II-2）は、猿投山山地の西から名古屋市にかけて東西に広がる、標高100～200mの丘陵地である。地質は瀬戸層群矢田川累層からなり、一部には藤岡面が確認できる。日進市の御岳山周辺や香具山周辺は、矢田川類層の基盤をなす古生界のホルンフェルスからなり、周辺よりも高くなっている（森、1971）。東山丘陵は本図幅の西側（名古屋市方面）にも広がっているが、西部では矢田川累層を不整合に唐山層や八事層の礫層が覆うため、段丘が発達し、標高も高い。また、矢田川累層は東部では砂礫質だが、西部ほど砂、シルト、粘土などから構成されることが知られている（経済企画庁、1972）。そのため東山丘陵東部は、段丘礫層を持つ東山丘陵西部地域よりも相対的に侵食されやすく、地形の逆転が起きている。

東山丘陵では名古屋市に近いほど、地形の改変が著しい。名古屋市名東区周辺では全面的に斜面の切り盛り造成が行われ、新しい住宅地が形成されている。

東部では、陶土やけい砂採掘による大規模な切土地が特徴的である。北隣「瀬戸」図幅の瀬戸市を中心とした地域では古くから窯業が盛んで、いわゆる「瀬戸物」と呼ばれる陶磁器やガラス産業の町として名高く、瀬戸陶土層のけい砂や粘土の採掘が行われていた。特に瀬戸北部から八草周辺にかけては、けい砂（石英質砂）、細粒雲母質粘土（キラ層）、含石英粒粘土（蛙目粘土；がえろめねんど）、灰白色粘土、青灰色粘土、含炭質粘土（木節粘土）などの良質な粘土を産出する（森、山本ほか、1972）。採掘は戦前まで坑掘により行われたため、明治期の地形図などでは地形改変を認めない

が、戦後、大型重機の導入や輸送手段の拡大に伴い1960年頃から現在の露天掘りが進んだ(図3-4)。採掘地の人工地形は複雑で、掘削による切土地が主だが、けい砂の洗浄用沈殿池や表土の置き場、その埋め戻しによる盛土も見られ、また、採掘場所が移動するたびにその場所も移動する(森山、1983)。しかし、採掘量は外国からの輸入の増加により年々減少し、八草地区ではかつて10鉱山あったが現在では3鉱山のみである(須藤・内藤、2000)。また、終掘後は表土を埋め戻し、緑化されているところもみられる。

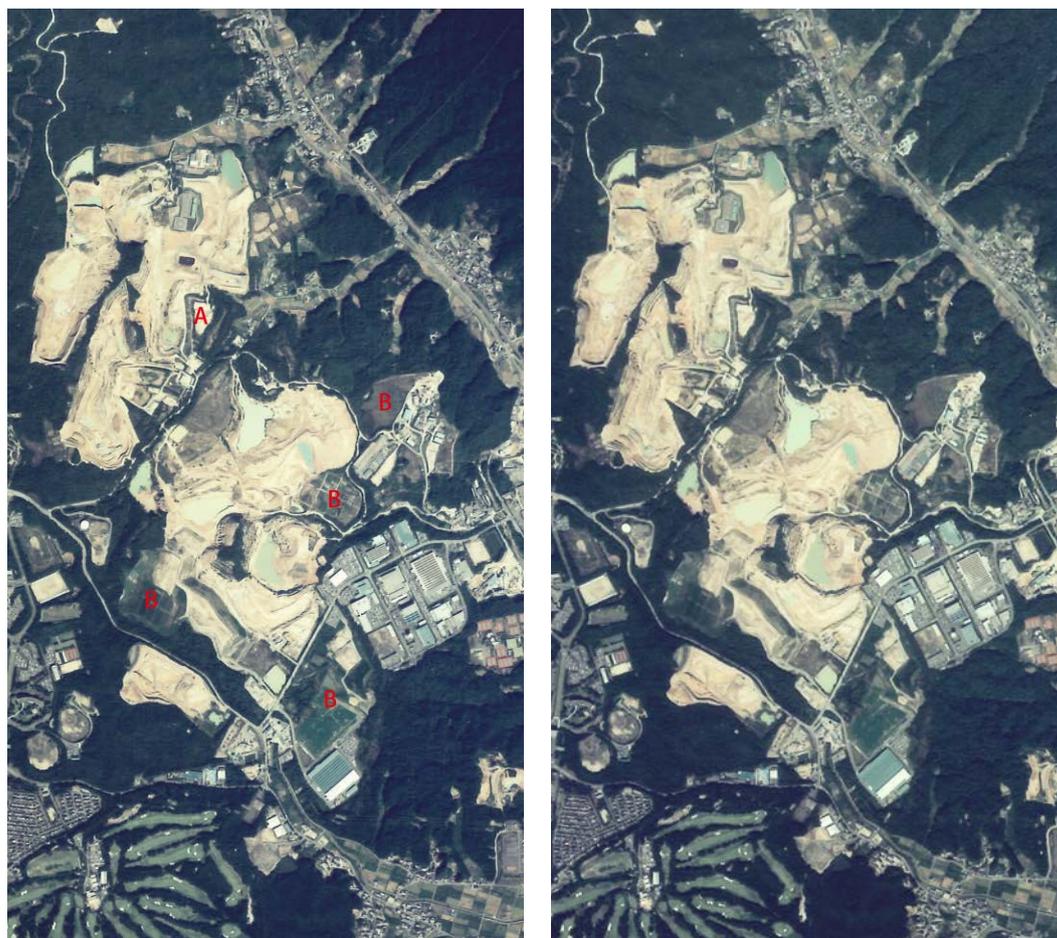


図3-4 豊田市八草地区の鉱山周辺

国土地理院撮影空中写真、CCB-2000X C9-14~15、平成12年10月5日撮影、縮尺約1/30000、(原寸、部分)。採掘が進行中の場所以外にも、表土置き場(「はね山」とも呼ばれる:A)や採掘終了後に表土を埋め戻して平坦化した場所(B)もみられる(森山:1983を加筆修正)。

豊明丘陵(II-3)も、矢田川累層からなる標高100~50m程度の丘陵地である。概ねなだらかな斜面をつくるが、これは過去に採掘されたため、本来はやせ尾根を持つ斜面であったと考えられている(経済企画庁、1972)。現在は、丘陵の西端は名古屋市緑区でもあることから、住宅やゴルフ場の造成に伴う人工平坦面が増加し、自然地形は不明瞭である。また、丘陵の分水嶺には愛知用水が通り、木曾川から採取した水を知多半島へ導水している。丘陵北部にある愛知池(正式名は東郷調整池)は東郷ダムの人造湖で、愛知用水を引き込み、上水、農業・工業用水などを名古屋市へ供給調整を行っている。

(3) 台地

西三河台地 (III-1) は本図幅内の中央に南北に広がる台地である。台地は北部ほど高く、地域によって段丘の発達は異なる。北部では標高 100m 以上になり、中部の美山町周辺で 70~50m、南部の知立市や安城市周辺では 20~30m 程度である。いずれの段丘面も古矢作川による各々の時代の堆積物を持ち、矢田川累層を不整合に覆う（経済企画庁：1972、森、山本ほか：1972）。

高位面に相当する三好面はみよし市ひばりが丘周辺にみられるが、段丘面は開析が進んでいる。段丘礫層はチャートを主体とする三好層である。矢作川支流御船川に沿う段丘も三好面相当と考えられている。

逢妻女川と猿渡川との間に広がる丘陵状の地形には、頂部に挙母面が発達する。浄水町周辺には標高 90m 程の平坦面も挙母面とみなされているが、他の挙母面と比べると極めて平坦で特異である。斜面は全域にわたって開析が進み、谷底低地が樹枝状に延びる。本面を構成する挙母層は、矢作川の本流に沿う場所では花こう岩質の礫が、支流周辺では矢田川累層から再堆積したチャート礫が多い。

中位面相当の碧海面は挙母面の南側、猿渡川左岸及び逢妻男川左岸の広い平坦面で、低地とは明瞭な崖によって隔てられる。碧海面を構成する碧海層は、上流では古矢作川の扇状地として、下流では三角州または浅海性堆積層として形成され、矢田川累層を不整合に覆う。

豊田市街南部や越戸町、花本町など矢作川に沿って発達する標高 30~50m の平坦面が、下位面相当の越戸面である。この面は、矢作川沿いの一部の地域にしか認められない。豊田市街南部においては上位の挙母面及び沖積面とは崖を形成するが、越戸町周辺では沖積面下に埋没する。段丘礫層は風化されていない砂礫層である。

その他の台地には、境川や天白川の両岸に広がる台地がある。境川の両岸には、下位面に相当する段丘が確認される。左岸では、みよし市街以南で境川に沿って前山周辺まで連続するが、上流側は谷底低地との境が不明瞭である。右岸は東郷町藪田や豊明市下高根などに点在するほか、同市新田町や阿野町周辺に広がる。なお、みよし市西一色では、段丘面下に平均径 10cm の円礫層が認められている（国土地理院、1975）。

天白川の両岸には、中位~下位面に相当する小規模な 3 段の段丘がある（国土地理院：1968b、愛知県：1985）。日進市本郷町より上流側では段丘面が谷底低地に漸移し、その境界は不明瞭である。

台地では、三好面および挙母面における人工改変が著しい。丘陵地の人工平坦地と同様に、尾根を切り、谷に厚く盛土を行い、起伏の少ない平坦面を造成している。名古屋近郊では住宅地造成による人工平坦地が多かったのに対して、豊田市周辺では 1970 年までにトヨタ自動車の大規模工場が西三河台地の各地に建設されるとともに、従業員の住宅確保のために周辺地域の住宅造成も行われてきた。起伏の少ない碧海面においても、大規模工場の建設の際には若干の土砂移動を伴うものと考え、人工平坦地とした。また、農業的性格も合わせ持つ地域であることから、畑や田などの農地として利用されている人工平坦地もみられる。ゴルフ場も数が多く、人為的な切り盛り造成によって作られた人工の起伏も随所で確認できる。

また、本図幅においては、地形学的あるいは地質学的調査により境川右岸に活断層の

猿投一境川断層が確認され、東郷町や豊明市周辺の段丘で西側隆起の変位が認められている（活断層研究会：1980、1991、国土地理院：2004 など）。猿投一境川断層の延長は藤岡町から南西方向に全長 19km ほどになり、北西隆起の逆断層で、単位変位量は上下成分で 4 m 程度、最新活動時期は 14000 年前頃、平均変位速度は 0.1m/1000 年と見積もられている。なお、本図幅周辺で発生している三河地震（1945 年）などの歴史地震との関係は認められていない。断層のグループとしては、本断層に続いて大府市周辺の高根山撓曲および大高一府断層を経て、西尾市周辺の高浜撓曲へと連なる猿投一高浜断層帯北部を構成し、その全長は約 51km におよぶ（地震調査研究推進本部地震調査委員会：2004、愛知県：1999）。

(4) 盆地、低地

豊田盆地（IV-1）は、豊田市街を中心に南北 4 km、東西 2.5 km ほどの矢作川流域に楕円状に開ける盆地である。盆地周縁は急崖を形成し、西三河台地と境する。矢作川は西三河山地で多量の砂礫を生産しながら流下してくるが、勾配の緩くなった豊田盆地では河川の侵食、運搬作用よりも堆積作用が卓越し、盆地状の低地が形成された。両岸は自然堤防の発達も良く、土砂の供給が多いことを伺わせる。

矢作川右岸には豊田市の市街地が発達し、自然堤防を外れた低地に盛土による宅地造成がみられる。

矢作川は豊田盆地南東端から狭窄部を通過するが、**矢作川沿いの低地**（IV-2）は葵大橋周辺から南方へ向かって再び開け、下流まで続く。本図幅では東西ともに山地や台地に限られるため、右岸の広いところで東西幅 2.5 km ほどであるが、河口の三河湾に臨む地域では約 12 km にも達する（経済企画庁、1972）。矢作川が運搬する砂礫のうち粒径の大きいものは豊田盆地に落とされて、そこから小礫まじりの粗砂が本地域へと達し、自然堤防を両岸に発達させる（森山、小沢：1972、春山・大矢：1986）。自然堤防は古くから掘削されて水田化したため、自然堤防が島畑化しているのも本地域の特徴である。

また、本調査では人工地形としては表現されないが、空中写真や地形図からは高速道路の盛土もみられる（図 3-5）。



図 3-5 豊田 JCT 周辺の盛土地 1:25000 地形図「豊田南部」平成 22 年更新（×1.2、原寸）

東名高速（北西-南東方向）と伊勢湾岸道路（北東-南西方向）が接続する。高速道路に沿って盛土記号がみられ、高速道路をアンダーパスで通過する一般道路も複数確認できる。

本図幅における**その他の低地**には、逢妻女川、境川、天白川に沿う低地がある。これらの河川は丘陵地や西三河台地を発し、概ね東北から南西方向へ流下する。いずれの河川も延長25km程度と短く、谷底低地の幅は最大でも約1kmと狭い。

逢妻女川は逢妻町付近で逢妻男川と合流し、逢妻川となる河川である。逢妻女川は大島町周辺など数箇所自然堤防が認められる。合流地点周辺では、縄文海進時の海成層が確認されている（経済企画庁、1972）。境川は東山丘陵から流出し、左岸や右岸の新田町周辺には低い段丘を発達させる。また、中川や蒲生池周辺に自然堤防が形成されている。天白川は東山丘陵を源流に持ち、東山丘陵と豊明丘陵とを分ける狭い谷底低地を流れて名古屋港へと注ぐ。

本図幅の低地は水田やため池として利用されていることが多く、住宅や工場建設による盛土がみられる場所は限定的である。しかし、谷底低地では上流人工改変地からの土砂が下流へ流出する経路になる場合がある。

3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

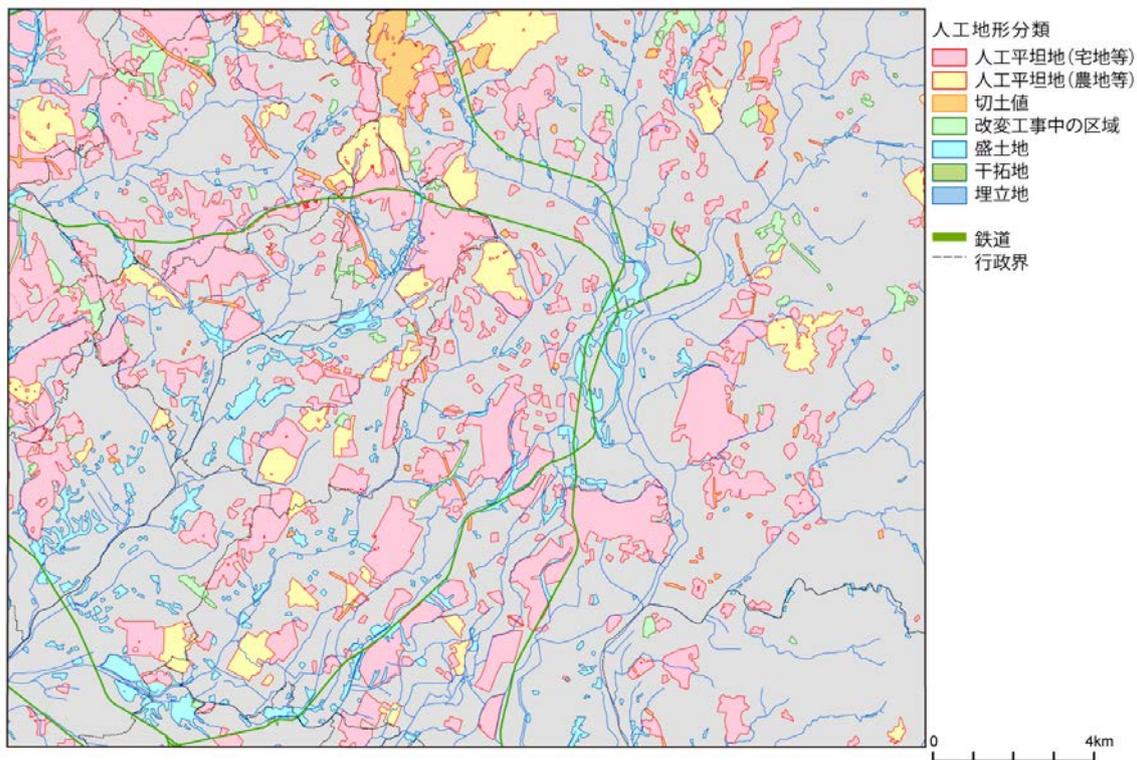


図 3-6 豊田地域の人工地形分類図

本図幅の人工地形は人工平坦地（宅地等）が最も多く、次いで人工平坦地（農地等）が全域にみられるが、切土地と盛土地の分布は限定的である（図 3-6）。特に丘陵地における人工平坦地が多く、ひばりヶ丘や日進ニュータウンなどの新しい地名が付けられている地域もある。愛知県は、土地区画整理事業などの都市基盤整備事業に積極的な地域として知られ、戦前から 1950 年代までは名古屋市を中心に進められてきたが、1960 年以降は本図幅にも及び、1970 年代にかけて盛んに行われてきた（奥部・熊谷ほか：1999、吉田・奥部ほか：2000）。しかし、山地や丘陵地における住宅造成は谷やため池などの軟弱地盤への盛土が行われ、地震動や豪雨により被害が想定される。そこ

で自然地形、人工地形分類図では谷を埋積する厚い盛土地の軸線を旧谷線によって示し、軟弱地盤の存在の目安とした。また、調査地域の基盤は風化が進行する花こう岩であり、このような地形、地質条件において陶土やけい砂採掘による裸地の拡大や山地での切り盛り造成は、土壌流出や斜面崩壊、土石流などさまざまな土砂災害の要因にもなる。

本図幅における人工地形の種目別面積の集計を表3-3に示すと、自然地形の約31%が人為的に改変されたことが読み取れる。地形種類別に人工改変の割合をみると、山地が約32%、台地が約23%、低地が約39%、水部が約10%となり、山地の改変が最も多い。

表3-3 調査地域内の人工地形面積

(単位:km²)

分類	人工平坦地		盛土地	切土地	改変工事 中の区域	人工地形 計(a)	自然地形 計(b)	(a/b)%	
	宅地等	農地等							
山地	山地斜面等	49.42	12.75	0.22	4.22	3.71	70.31	218.26	32.2%
	麓斜面及び崖錐	0.07	0.02	0.02	0.02	0.00	0.13	1.42	9.2%
	土石流堆積地	0.02	-	-	-	-	0.02	0.02	89.4%
	山地計	49.51	12.77	0.24	4.24	3.71	70.47	219.70	32.1%
台地	砂礫台地(更新世段丘)	14.24	2.22	2.25	0.41	0.41	19.53	83.82	23.3%
低地	緩扇状地	0.13	0.02	0.01	0.00	-	0.17	3.08	5.4%
	扇状地	0.11	0.02	0.00	0.02	0.00	0.15	1.44	10.5%
	谷底低地	6.79	1.61	12.62	0.37	0.67	22.06	86.73	25.4%
	氾濫原低地	0.02	-	0.04	-	-	0.06	0.15	41.5%
	自然堤防	0.01	-	0.08	-	-	0.09	8.50	1.1%
	旧河道	0.00	-	0.06	-	-	0.06	0.75	8.2%
	湿地	0.00	-	0.02	-	-	0.02	0.13	15.6%
	河原・河川敷	0.02	-	0.03	-	0.01	0.05	5.61	0.9%
	低地計	21.31	3.87	15.12	0.80	1.09	42.19	106.38	39.7%
水部	現水部	-	-	-	-	-	-	9.00	0.0%
	旧水部	0.84	0.07	0.25	0.02	0.05	1.23	2.60	47.4%
	水部計	0.84	0.07	0.25	0.02	0.05	1.23	11.60	10.6%
合計		85.90	18.93	17.86	5.47	5.26	133.42	421.50	31.7%

資料:「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による。

山地では、特に山地斜面から宅地等への改変が約49km²と最多で、宅地に次いで農地も約12km²になる。採石地などの切土地も約4km²ある。改変工事中の区域も約3km²あり、工事終了後にはこれらが宅地に移行する可能性が高い。台地においても、三好面や拳母面では周辺の斜面も含めて改変しているため、これらの宅地、農地造成による人工平坦面は約16km²に達する。台地では盛土地もみられるが、これは台地上の浅い谷へ盛土を行った場所を表す。低地では谷底低地の約6km²が宅地等へ、約1km²が農地等の人工平坦地になっているが、これは谷底低地の上流部において周辺の山地や丘陵地の切り盛り造成地の一部として厚く盛土され、本来の谷筋が不明瞭な場所である。一方で、山地や丘陵地に形成された大規模な住宅造成地などには、建物などが建てられていながらも自然地形である谷筋が判読できるようところがあり、前者の人工平坦地の厚い盛土地とは区別し、通常の盛土地として表現している。谷底低地で約12km²に及ぶ盛土地のなかには、豊田市街や逢妻川沿いの低地の盛土地以外にも、上述したような人工平坦地のなかの薄い盛土地が含まれている。

水部はかつてのため池の縮小や消失により旧水部の約 47%が改変され、人工平坦地（宅地等）や盛土地になっている。言い換えれば、調査地域における住宅地あるいは工場用地のうちの一定割合の土地は、かつてのため池や河川などの跡地に立地していることになる。

このように自然地形は、地域の自然環境の平時や災害時における振る舞いを知る手がかりとなるが、自然地形の景観を留めないような人工改変地では、災害の危険性を知るための有益な情報が失われてしまう。しかし、人工改変前の空中写真や旧版地形図の判読や過去の災害情報を照合すれば、さまざまなスケールにおいて土地利用の履歴や、地域の地理に関する多くの情報を得ることが可能である。

3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅において地形条件と密接な関係を有する自然災害としては、地形の人工改変を誘因とする地盤災害（地震による造成地の崩壊、地盤変形等）、低地への宅地の拡大に伴う浸水被害等の増加（従来の水田冠水が宅地浸水となるような被害対象変化）、急傾斜地の崩壊や地すべり等の土砂災害等をあげることができる。

(1) 地震災害

本図幅を含む東海地方は、たびたび大規模な地震災害に見舞われ、明治以降では明治 24（1891）年 10 月 28 日に発生した濃尾地震の被害は顕著である。ただし、本図幅内では、比較的地盤の安定した山地や丘陵地、台地が大半を占めていることや、当時はまだ集落もまばらであったことから大きな被害は生じなかった。しかし、近年、都市化の進展にともなう大規模な人工改変地が多く、谷埋めや低地の盛土上に多くの住宅、工場が建設されている。これらの地域では台地等自然地形に比べ、地盤が軟弱な場合が多く、大きな地震が発生した場合には斜面崩壊や地盤変形等の地盤災害が発生する可能性が高いと考えられる。

(2) 降雨災害

本図幅では、地形的に山地や丘陵地、台地が広い面積を占め、降雨による浸水被害は矢作川、境川、逢妻女川等の低地部に限られている。また、山地や山麓部では土砂災害が発生している箇所もあるが、数は少なく、降雨災害は比較的少ない地域といえる。しかし、近年、人工平坦化に伴う切り盛り造成地が急激に増加し、以前は谷であった箇所が埋土により現在では谷の形状を留めていない場所も多くみられる。そのような谷埋めで生じた斜面では、異常降雨時には地盤が緩みやすく斜面崩壊の危険性が高い。

また、丘陵地、台地での急激な人工平坦地の増加により、異常降雨時に生じた雨水が一気に周辺の低地部へ流れ込むこととなることから、谷底低地などでは河川の増水や内水氾濫に、今まで以上に留意する必要がある。

今後、名古屋都市圏の拡大等にともない、丘陵、台地の切り盛り造成の増加とともに、谷底低地への埋土も増加すると考えられることから、斜面地での斜面崩壊対策や、造成地での排水対策等が、ますます必要になってくると考えられる。

4 土地利用の変遷の概要

4.1 過去の土地利用状況の概要

(1) 明治 24 (1891) 年頃 (現在から概ね 120 年前) の土地利用

本図幅における 5 万分の 1 地形図は、明治 24 (1891) 年測図、明治 32 (1899) 年刊行「拳母村」が最も古い。同地域では 2 万分の 1 正式図も、同じ時代の明治 24 (1891) 年測図、明治 26 (1893) 年に刊行されている。2 万 5 千分の 1 地形図はそれより 20 年以上後の大正 9 (1920) 年に測図、大正 12~13 (1923~1924) 年にかけて刊行された。

明治期の土地利用分類図 (第 1 期) は、明治 24 (1891) 年測図、明治 32 (1899) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「拳母村」と、同じく明治 22 (1889) 年測量、明治 25 年刊行の 5 万分の 1 地形図「名古屋」(明治期と現在の地形図の図郭のずれを補正に使用※) との判読により土地利用分類を行ったものである (図 4-1)。

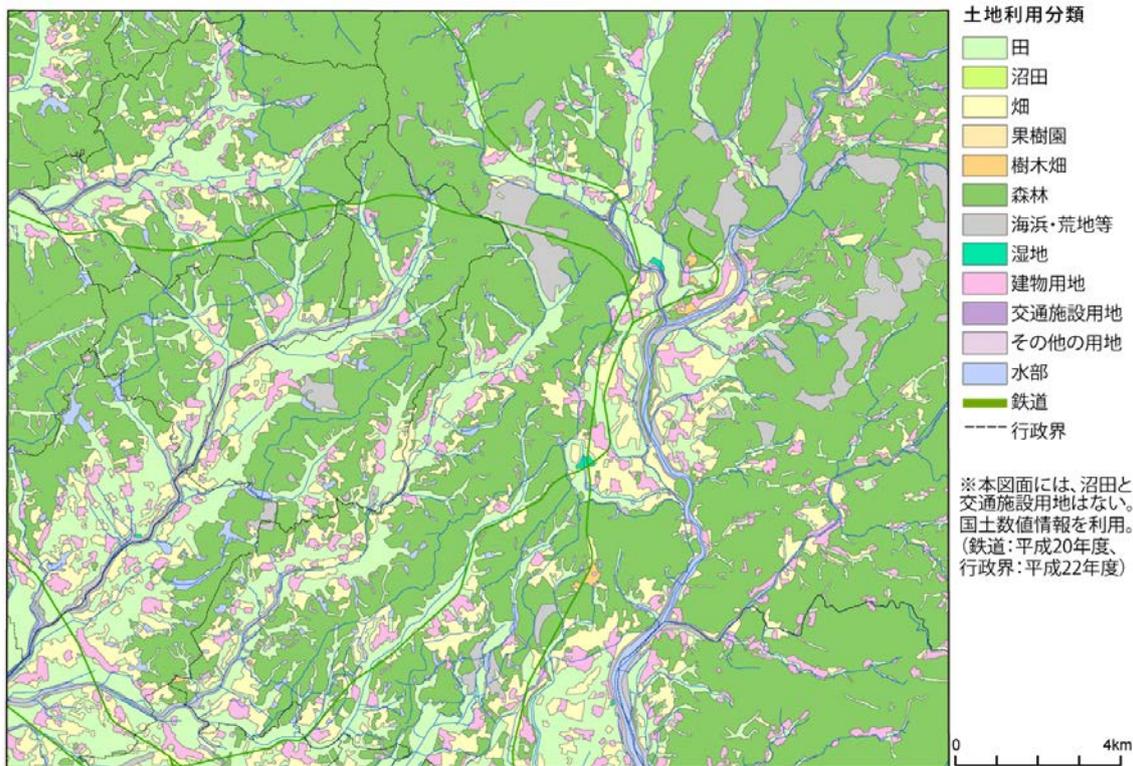


図 4-1 豊田における約 120 年前 (明治 24 (1891) 年頃) の土地利用

① 山地、丘陵地における土地利用

本図幅は山地および丘陵地帯であり、西三河山地、猿投山山地、東山丘陵、藤岡・乙部丘陵、豊明丘陵の全域にわたり森林が大半を占め、集落や畑が山麓の緩斜面や小規模な段丘に分布する。地形図で植生をみると、東山丘陵の岩作周辺では松林が多いが、他は概ね針葉樹林で、山麓や集落周辺に広葉樹林や松林がみられる。西三河山地と藤岡・乙部丘陵南端部は、大正頃までは頻繁に発生した斜面崩壊による禿敷地を荒地記号で表現したものと推定される (図 4-2、富田：2012)。

※明治期の地形図図郭は測量原点の違いにより、現在の地形図図郭より 10 秒 4 東側にずれている。そのため明治期の地形図を刊行図に一致せるには、このずれの補正が必要である。

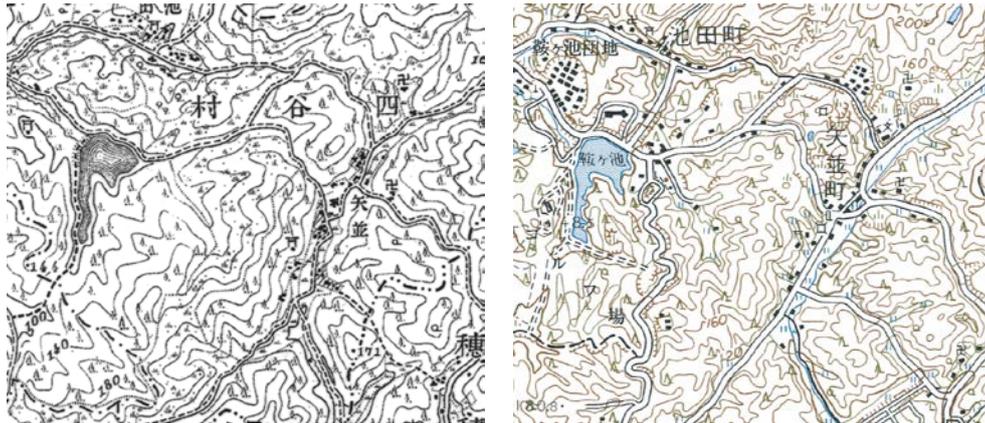


図 4-2 豊田市矢並町周辺の変遷

1:50000 地形図 (左)「拳母村」明治 24 年測図、(右)「豊田」平成 11 年修正 (×1.5、部分)

鞍ヶ池の西側の湿地は矢並湿地と呼ばれ、ラムサール条約への登録が検討されている。湿地の保全のため、平時は周囲にフェンスが張られ管理者以外入ることができない (富田、2012)。

また、**西三河山地**には部分的に小規模な谷底低地があり、そこには田がみられる。**東山丘陵**と**豊明丘陵**には狭長な谷が深く入り込み、かんがい用に谷頭や谷底をせき止めたため池や水田が多数分布する。

② 台地における土地利用

西三河台地は山地や丘陵地の土地利用と同様で、概ね森林に覆われ、山麓の集落や畑、台地を侵食する小さな谷底低地にため池と水田の配置である。**西三河台地**には、明治期に矢作川から取水する枝下用水と明治用水との2つの用水路網が建設され、南部の和会や知立周辺など水利の悪い台地上でも田がつくられるようになった。用水は台地上のわずかな高まりを縫うように走り、明治用水は台地の東部を、枝下用水は台地中央部をかんがいている。

③ 低地における土地利用

豊田盆地では、矢作川をつくる低地の微地形に調和した土地利用がみられる。豊田盆地は旧拳母村を中心として矢作川の舟運交易によって発達し、矢作川の右岸には微高地に拳母、樹木、小坂、長興寺などの集落と畑、桑畑が、左岸も同様に寺部、渋川などの集落と畑があり、低地部分は水田である。

本図幅には、そのほかに**天白川沿いの低地**、**境川沿いの低地**、**逢妻川沿いの低地**、**矢作川沿いの低地**があるが、全ての低地において谷底低地および低地の水田と、自然堤防の微高地を利用した集落や畑の配置がみられる。

本図幅のような山地、丘陵地帯における明治期の土地利用をみると、人々の暮らしの場は山麓や平坦な台地、または低地の微高地に分布している。起伏の大きい山地や丘陵地は森林に覆われ、低地の軟弱地盤は田にするなど、自然地形に適合した土地利用が広がっていた。干ばつ対策として、丘陵を侵食する谷頭へのため池の建設や、用水路の建設により台地をかんがいさせるなど、地形を活用した土木工事も行われていたが、これらは自然地形の改変を最小限に留めるものであった。

(2) 昭和 46 (1971) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図 (第 2 期) は、昭和 46 (1971) 年に編集、昭和 47 (1972) 年に刊行された 5 万分の 1 地形図「豊田」の判読により土地利用分類を行った (図 4-3)。昭和 46 (1971) 年刊行の 5 万分の 1 地形図「豊田」は、昭和 43 (1968) 年から昭和 44 (1969) 年にかけて空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

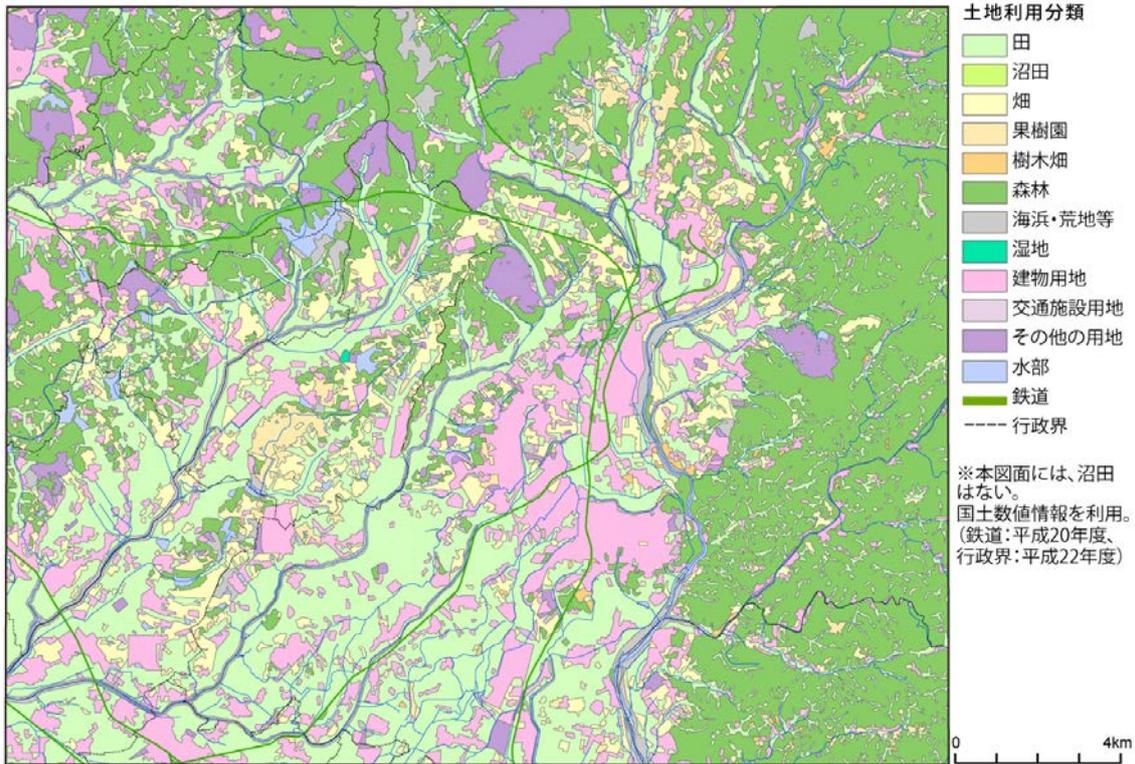


図 4-3 豊田における約 40 年前 (昭和 46 (1971) 年頃) の土地利用

① 山地、丘陵地における土地利用

西三河山地では、鞍ヶ池の南側にゴルフ場がつくられている他は、概ね森林が広がり、山麓の畑と集落、谷底低地の水田という土地利用が残されている。山地の植生はコナラ-クリ群落やモチツツジ-アカマツ群集に加え、クロマツ、スギ、ヒノキ、サワラ植林も行われている (環境庁, 1981)。明治期にみられた荒地も植林にもより減少した。山地内の狭長な谷底低地は、明治期と比較すると増えたようにみえるが、これは基図の測量方法の違いによるものと推察される。

東山丘陵と猿投山山地では森林が減少し、ゴルフ場や住宅地、あるいはそれらの造成地が目立つ。植生をみると、猿投山はコナラ-クリ群落とクロマツ植林に覆われ、東山丘陵ではモチツツジ-アカマツ群集とネザサ-ススキ群集が広がる (環境庁, 1981)。**東山丘陵**の西部には名古屋市名東区が含まれ、梅森坂の住宅地が完成しているほか、地形図では極楽、大針、梅が丘などは造成中で網の目状の街路が判別できるなど、市街地の広がりが見える (図 4-4)。同丘陵の東部の荒地は、珪砂や粘土の採掘場である。



図 4-4 住宅造成地の変遷（名古屋市名東区）

1:50000 地形図（左）「挙母村」明治 24 年測図、「豊田」（中）昭和 46 年編集（右）平成 11 年修正（×0.9、部分）

豊明丘陵においても住宅地や造成地が増加し、特に北側斜面で顕著である。南側斜面では、愛知池の建設と畑の広がり特徴的である。昭和 36（1961）年に完成した愛知用水は、木曾川本流から取水して東山丘陵と豊明丘陵をかんがいしながら知多半島へと達し、農業、工業、上水道用と多目的に利用されている。愛知池は東郷ダムに伴う人造湖で、愛知用水の調整池としての役割を担っている。

藤岡・乙部丘陵においても森林の減少と、畑と果樹園および市街地の拡大がみられる。果樹園では桃の栽培が行われ、県内でも有数の産地として知られる。一方、建物用地などの都市的な土地利用へ転換は、自動車製造関連企業の進出に伴う現象と考えられる。

②台地における土地利用

本図幅において劇的な変化を遂げたのが、西三河台地である。枝下用水と明治用水のかんがいにより、台地西側は畑や果樹園に、また南部は水田に転換され、多くの森林が失われた。大規模な工場や市街地の拡大もみられるが、これはトヨタ自動車の進出の影響である。トヨタ自動車は、昭和 12（1937）年に刈谷から西三河台地北東部の論地ヶ原に本社工場を設立し、周辺にも多数の工場や関連企業が開業し、日本を代表する自動車工業都市へと急成長を遂げた（図 4-5）。挙母村は昭和 31（1951）年に挙母市となり、昭和 39（1959）年には豊田市へと改名し、自動車製造業の大規模事業所等が集積する特徴的な産業都市となっている。

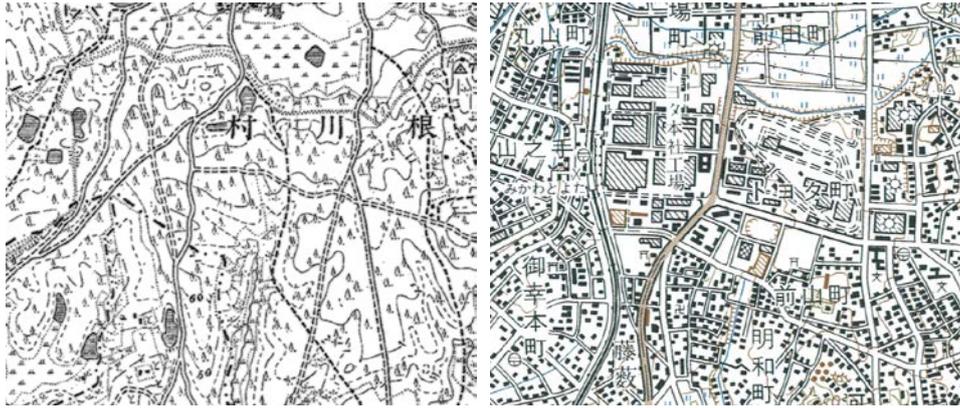


図 4-5 トヨタ自動車本社工場周辺の変遷

1:50000 地形図 (左)「拳母村」明治 24 年測図、「豊田」(右)平成 11 年修正 (×1.2、部分)

明治期の地図から、トヨタ自動車本社工場は針葉樹が生い茂る台地の縁に建設されたことがわかる。工場ができると、周辺に関連企業や従業員の住宅が建ち並び、鉄道や道路も建設された。豊田市、トヨタ町という企業名が行政名になった珍しい自治体である。

③ 低地における土地利用

豊田盆地は、豊田市駅周辺を中心に建物用地が広がっている。盆地南端にみられる樹木畑の桑畑は、明治末期以降から昭和初期にかけて養蚕や製糸業が盛んだった頃の名残と考えられる。低地の水田は明治期とほとんど変化しない。

天白川沿いの低地、境川沿いの低地、逢妻川沿いの低地、矢作川沿いの低地のいずれの低地においても、谷底低地の水田の多くが住宅や工場へ転換している。しかし、明治期の集落や畑の配置も崩れずに、残されている地域がまだ多くみられる。

本図幅における昭和期の土地利用は、愛知用水の開発に伴う畑や水田の広がり、丘陵地の大規模な住宅地開発やゴルフ場開発、トヨタ自動車の進出による台地の工業化および都市化に特徴づけられる。一方、丘陵を開析する谷底低地には一部で工場等の進出がみられるものの、田や畑も多く残され、谷頭に設けたため池を利用して農業が続いていたものとみられる。

4.2 土地利用の変遷の概要

(1) 土地利用面積の推移

図 4-6 と表 4-1 は、明治期 (1891 年) および昭和期 (1971 年) の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ (国土数値情報、2006) から、豊田地域における**田**、**畑** (畑・その他の農用地)、**森林等** (森林・荒地・水面)、**宅地等** (建物・その他の用地) の主要な土地利用 4 項目について面積の推移を集計した結果である。

明治期の土地利用は、森林等が約 256km²と最も多く、田 (約 103km²)、畑 (約 55km²)、宅地 (約 33km²) の順になっていた。表 4-1 では、豊田市が対象地域のおおよそ半分を占めるため、地域別にみると豊田市の絶対値が圧倒的に大きい。その豊田市を中心とみると、明治期においては森林等が約 136km²と極めて広く、田も約 50km²、畑は約 31km²、宅地も約 18km²と各項目のそれぞれ半数以上に上っていた。豊田市以外の地域では、森林等は日進市 (約 20km²)、岡崎市 (約 17km²)、みよし市 (約 14km²)、名古屋市 (緑区、

名東区、天白区を合わせて約 12km²) でまとまった広がりを持つ。田は豊田盆地や矢作川や逢妻川などの谷底低地にまとまってあったため、豊田市以外では境川や逢妻女川低地のあるみよし市(約 11km²)、天白川上流の日進市(約 6 km²)、境川に沿った刈谷市(約 6 km²)、豊明市(約 5 km²)に小規模に分布していた。畑は豊田市のほかに刈谷市、豊明市、日進市、みよし市などの丘陵や台地にあった。宅地等は全体の約 7%に過ぎず、とりわけ安城市、大府市、長久手市では、本図幅においては 0 km²である。

昭和期の土地利用をみると、明治期に多かった森林等が半数程度に減少し、田と宅地等が増加している。各市町村の明治期からの面積の変化をみると、豊田市では田が約 78km²(約 27km²増加)、森林等は約 75km²(約 60km²減少)、宅地等は約 53km²(約 35km²増加)と変化が大きい。田は他の市町村では概ね減少傾向であり、豊田市のみが大きく増加に転じている。田は明治用水や枝下用水の完成で、西三河台地が森林から田へと転換されたもので、宅地等もトヨタ自動車の成長が影響して増加したものと考えられる。本調査では昭和期の土地利用として、昭和 45(1970)年の土地利用を調査したが、昭和 10(1930)年頃であればトヨタ自動車は豊田市へ移る前であり、その頃には田がより広がっていたものと考えられる。

平成期では田、畑、森林等が全て減少し、宅地等が急増する。田と畑はそれぞれ昭和期の 60~65%ほどになり、森林等は明治期と比べると約半分、宅地等は明治期の 5倍以上増加している。豊田市の変化をみると、畑が約 20km²で約 12km²の減少、森林等も約 82km²で約 54km²減少と大きく減少するが、宅地等は約 83km²で約 65km²増加する。その他の市町村においても概ね同様の傾向にあり、田、畑、森林等は減少する一方で、宅地等は名古屋市(約 13km²増加)、刈谷市(約 10km²増加)、日進市(約 14km²増加)、みよし市(約 13km²増加)で増加する。これらの市町村では、現在の宅地等の約半数が昭和期のほぼ倍になっていることから、両時期の間に宅地造成が急激に進行したと考えられる。

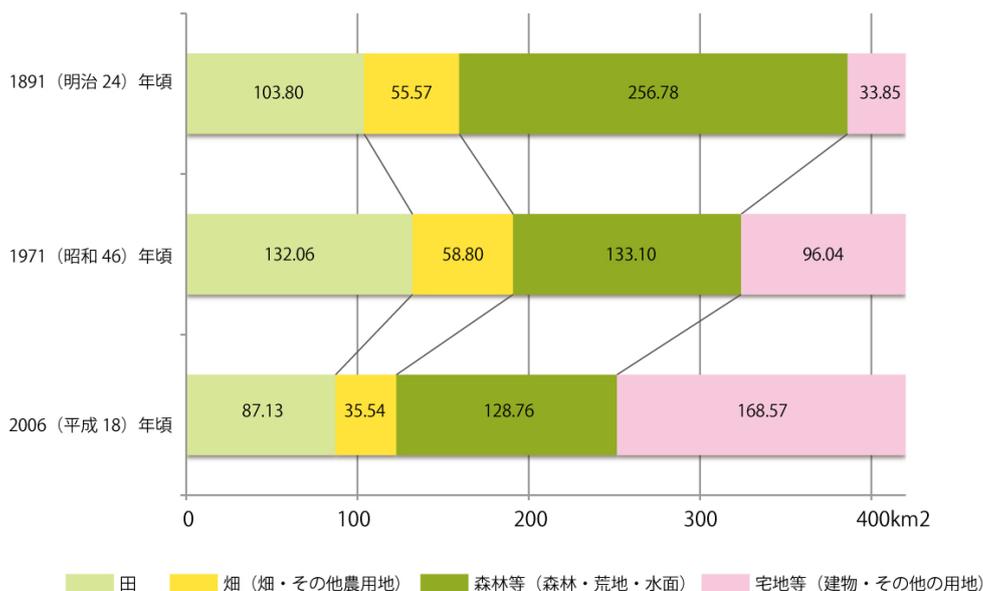


図 4-6 土地利用別面積の推移 (1891、1971、2006 年)

表 4-1 土地利用別面積の推移（1891、1971、2006 年）

区分	名古屋市													合計			
	名古屋市区				岡崎市	刈谷市	豊田市	安城市	大府市	知立市	豊明市	日進市	みよし市		長久手市	東郷町	
	緑区	名東区	天白区	小計													
1891年(明治24年)頃	田	1.43	3.87	0.78	6.06	4.04	6.67	50.84	0.13	0.19	1.96	5.69	6.48	11.90	1.27	8.56	103.80
	畑・畑・その他の農用地	0.12	0.36	0.30	0.78	1.56	6.00	31.95	0.19	0.00	1.29	4.65	4.83	3.23	0.12	0.87	55.57
	森林等(森林・荒地・水面)	4.54	4.09	3.59	12.22	17.86	6.02	136.29	0.36	0.03	1.12	4.89	20.38	14.81	5.49	7.31	226.78
	宅地等(建物・その他の用地)	0.29	0.28	0.24	0.79	3.37	2.01	18.59	0.00	0.00	0.94	2.19	3.24	1.60	0.00	0.51	33.65
1910年(昭和46年)頃	田	2.29	2.01	1.39	5.68	11.81	7.22	78.10	0.34	0.18	1.76	5.07	10.36	7.51	1.14	2.88	132.08
	畑・畑・その他の農用地	0.86	△ 1.87	0.63	△ 0.38	7.77	0.56	27.28	0.21	△ 0.01	△ 0.20	△ 0.62	3.89	△ 4.39	△ 0.13	△ 5.70	28.26
	森林等(森林・荒地・水面)	1.52	0.46	0.94	2.03	2.99	3.60	30.37	0.06	0.00	0.18	3.12	3.66	9.02	0.54	3.23	58.80
	宅地等(建物・その他の用地)	1.41	0.11	△ 0.26	1.25	1.33	△ 2.39	△ 1.59	△ 0.13	0.00	△ 1.11	△ 1.53	△ 1.17	5.79	0.42	2.36	3.23
2006年(平成18年)頃	田	0.26	0.01	0.18	0.45	2.45	4.79	52.84	0.49	0.13	1.43	6.57	5.38	6.70	0.18	5.75	87.13
	畑・畑・その他の農用地	△ 1.17	△ 3.86	△ 0.58	△ 5.61	△ 1.80	△ 1.88	2.00	0.37	△ 0.06	△ 0.54	0.88	△ 1.12	△ 5.20	△ 1.09	△ 2.82	△ 16.67
	森林等(森林・荒地・水面)	0.57	1.19	0.11	1.86	0.98	1.95	19.80	0.02	0.00	0.04	1.27	2.32	5.52	0.28	1.49	35.54
	宅地等(建物・その他の用地)	0.45	0.83	△ 0.20	1.08	△ 0.68	△ 4.04	△ 12.15	△ 0.17	0.00	△ 1.25	△ 3.38	△ 2.51	2.29	0.17	0.82	△ 20.02
	田	1.49	1.10	0.82	3.71	19.55	1.73	81.81	0.60	0.01	0.11	1.65	9.93	4.40	3.16	2.71	128.79
	畑・畑・その他の農用地	△ 2.86	△ 2.99	△ 2.67	△ 8.52	1.89	△ 4.28	△ 54.48	△ 0.36	△ 0.02	△ 1.02	△ 3.24	△ 10.45	△ 10.41	△ 2.33	△ 4.80	△ 98.02
	森林等(森林・荒地・水面)	3.83	6.31	3.69	13.83	3.96	12.82	83.22	0.16	0.08	3.75	7.94	17.33	14.91	3.25	7.32	168.57
	宅地等(建物・その他の用地)	3.57	6.03	3.44	13.04	0.59	10.21	84.84	0.16	0.08	2.80	5.74	14.08	13.31	3.25	6.80	134.71

- 1891年及び1971年は土地利用分類図の図上計測値。2006年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。
- 1971年及び2006年の下段は、1891年からの増減量。
- 行政区域は2011（平成22）年3月31日現在の区域を当てはめた。

(2) 地形分類別土地利用面積の推移

明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を主要な自然地形分類項目ごとに集計したものが、図4-7と表4-2である。田は3時期ともに山地斜面等、台地等、谷底低地等にみられる。昭和期には山地斜面等が約12km²増加し、約38km²になったが、平成期には約24km²と、明治期に比べても約2km²減少し、昭和期からは約14km²も減少した。

畑・その他農用地は、台地等を利用している面積が大きく、次いで山地斜面等、自然堤防等、谷底低地等となる。この項目においても、昭和期には明治期より面積が4km²ほど微増し、山地斜面等の利用が明治期よりも約7km²増加した。平成期になると、畑の総数は昭和期から約23km²も減少する。特に台地等の減少が目立ち、昭和期には約28km²あったが平成期には約12km²に落ち込んだ。

森林・荒地・水部は明治期では極めて多く、約227km²も広がっていた。多い順に山地斜面等（約115km²）、台地等（約57km²）、谷底低地等（約36km²）が利用されていたが、昭和期には全体で約94km²減少し、当時の土地利用を田（約132km²）とほぼ二分する形となった。平成期ではさらに減少するが、山地斜面等、台地等、自然堤防等の面積は昭和期と比べて2～3km²程度の減少に留まる。減少率が大きいのは谷底低地等およびその他の項目で、例えばため池などが宅地等へ変化したことが推察される。

建物・その他の用地は、昭和期、平成期といずれも増加する。明治期においては、主に台地等（約18km²）を利用していたが、昭和期には台地等（約49km²）に加えて山地斜面等（約30km²）の利用が目立つようになる。平成期にかけては、山地斜面等（約53km²）および台地等（約69km²）が昭和期の1.5倍近くになり、谷底低地等（約31km²）やその他の地形（約12km²）の利用もみられる。山地斜面等においては尾根や谷の切り盛り造成地である場合が多く、谷底低地やその他の地形では旧水部の埋立てによる宅地造成など、地形条件の悪い地域への宅地造成が進んだと推察される。

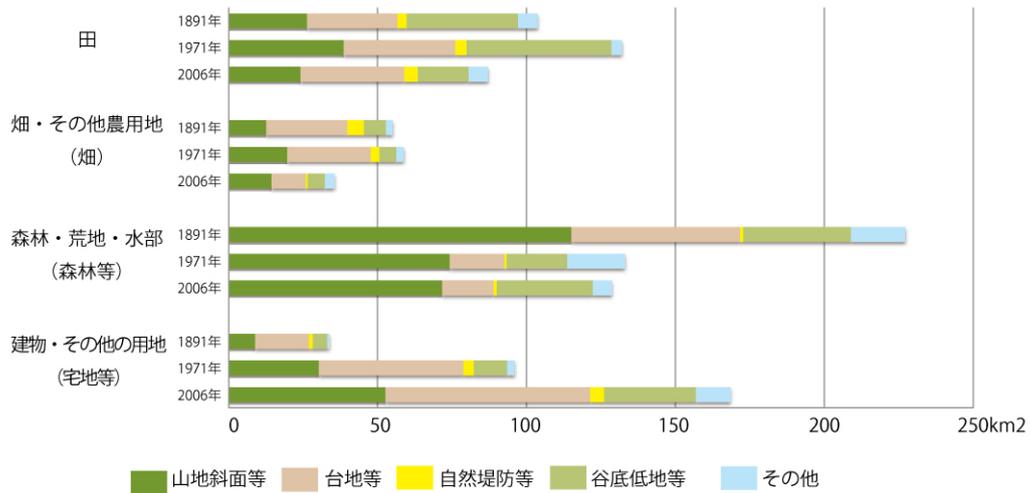


図 4-7 地形分類別の土地利用面積の推移 (1889、1971、2006 年)

- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図 (1891 年、1971 年)、国土数値情報の土地利用細分メッシュ (2006 年) を 100m メッシュデータに変換し、各図のメッシュごとの分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。
- 地形分類の内訳は次の通り。
 山地斜面等：山地斜面、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地、
 台地等：砂礫台地、
 自然堤防等：自然堤防、砂州・砂堆、
 谷底低地等：緩扇状地、扇状地、谷底低地、旧河道、湿地、
 その他：河原・河川敷、現水部、旧水部の各合計。

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移 (1891、1971、2006 年)

(単位: km²)

地形分類		山地斜面等	台地等	自然堤防等	谷底低地等	その他	計
年代	土地利用区分						
1891年(明治24)頃	田	26.31	30.46	3.03	37.38	6.61	103.80
	畑(畑・その他の農用地)	12.63	27.28	5.52	7.38	2.30	55.11
	森林等(森林・荒地・水面)	115.09	56.65	1.11	36.15	18.23	227.23
	宅地等(建物・その他の用地)	8.95	18.01	1.30	4.86	0.74	33.85
1971年(昭和46)頃	田	38.66	37.43	3.86	48.59	3.51	132.06
		△ 12.35	6.97	0.83	11.21	△ 3.11	28.26
	畑(畑・その他の農用地)	19.70	28.07	2.90	5.65	2.49	58.80
		7.07	0.79	△ 2.63	△ 1.73	0.19	3.69
	森林等(森林・荒地・水面)	74.28	18.39	0.73	20.32	19.38	133.10
		△ 40.81	△ 38.26	△ 0.38	△ 15.83	1.16	△ 94.13
宅地等(建物・その他の用地)	30.35	48.51	3.48	11.21	2.50	96.04	
	21.40	30.50	2.17	6.35	1.76	62.19	
2006年(平成18)頃	田	24.16	34.83	4.53	17.03	6.58	87.13
		△ 2.15	4.37	1.49	△ 20.35	△ 0.03	△ 16.67
	畑(畑・その他の農用地)	14.43	11.52	0.65	5.78	3.17	35.54
		1.80	△ 15.76	△ 4.87	△ 1.61	0.87	△ 19.57
	森林等(森林・荒地・水面)	71.70	17.27	1.10	32.22	6.46	128.76
		△ 43.39	△ 39.38	△ 0.01	△ 3.93	△ 11.77	△ 98.47
宅地等(建物・その他の用地)	52.69	68.78	4.69	30.74	11.67	168.57	
	43.74	50.77	3.39	25.88	10.93	134.71	

- 調査結果の自然地形分類図及び2時期の土地利用分類図、国土数値情報データをそれぞれ 100m メッシュに変換し、メッシュごとに分類の組み合わせを積み上げて集計した。
- 土地利用区分は、1891 年、1971 年は本調査の土地利用分類図、2006 年は国土数値情報(土地利用細分メッシュ)による。
- 地形分類の内訳は、図 4-7 脚注に同じ。
- 1971 年及び 2006 年の下段の数字は、1891 年からの増減量。

(3) 人口集中地区の変遷

図 4-8 および表 4-3 は国勢調査の人口集中地区 (DID[※]) データから作製した、豊田都市圏の 1960 (昭和 35) 年、1980 (昭和 55) 年、2005 (平成 17) 年の 3 時期にわたる都市域の変遷を示したものである。本地域は西側に中京圏最大の名古屋都市圏を抱えるため、名古屋 10km 圏および 20km 圏も合わせて示した。



図 4-8 人口集中地区の推移 (1960、1980、2005 年)

資料：国土数値情報 (人口集中地区)

表 4-3 豊田 20km 圏内における DID の地形分類別面積

(単位:km²)

区域	地形分類別面積					合計
	山地	丘陵地	台地	低地	水部	
豊田都市圏	90.89	128.71	140.00	52.91	9.00	421.50
うち1960年DID内	-	-	1.00	1.17	0.00	2.17
うち1980年DID内	0.94	9.81	27.00	4.28	0.34	42.38
うち2005年DID内	2.24	26.55	43.89	7.18	0.69	80.55

資料：自然地形分類図、国土数値情報 (人口集中地区) より集計。

1960 年では周辺の名古屋市や岡崎市、安城市、瀬戸市などに DID が確認できるが、本図幅においては豊田市駅を中心にした豊田市街と知立市、刈谷市の一部に点在する程度で、面積も合わせてわずか約 2 km²であった。

※人口集中地区 (DID= densely inhabited district)：1960 年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区 (約 50 世帯) を単位として、原則として調査区の人口密度は 1km²につき 4000 人以上あり、そのような調査区が互いに隣接して、その合計が 5000 人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる (浜、1989)。

1980年になると、1960年のDIDが周辺へと拡大し、豊田市ではトヨタ自動車本社工場や元町工場一帯へ、北側では猿投駅周辺の青木町や井上町へ、東側へは矢作川左岸の高橋町、美里周辺へと拡大した。知立市、刈谷市においても、1960年のDIDから周辺へ拡大している。この時期の豊田10km圏内では、北側、東側、南側に新たなDIDがみられるようになる。北側の小規模なDIDは豊田市保見が丘の保見団地で、1978（昭和53）年から入居が始まり、1980年代後半からは自動車関連工場で急増した外国人労働者が多く居住する地域である（平岡・野間、2000）。みよし市（当時は三好町）の中心部にも小規模なDIDが形成され、豊田市と知立市の間には、名鉄三河線の三河八橋駅から竹村駅にかけての地域でDIDがみられる。西部の名古屋市名東区や天白区、豊明市においても広範囲でDIDが形成されるが、これらは名古屋都市圏の拡大と考えられる。

2005年になると、DID全体の面積も、約81km²と1980年の約2倍に増加するが、豊田市、豊明市、みよし市においては従来のDIDが若干拡大する程度で、周辺地域との結びつきはみられない。刈谷市と知立市のDIDは名鉄名古屋本線一ツ木駅周辺へ拡大することで両者が繋がった。みよし市三好ヶ丘周辺には新たにDIDが形成されている。豊田市上郷町のトヨタ自動車上郷センター周辺にもDIDがみられ、岡崎市のDIDに接続している。一方、西部では名古屋都市圏からの影響で、名古屋市名東区から日進市へ、天白区および緑区から東郷町へかけてDIDの拡大が確認できる。このように本図幅においては、名古屋都市圏の影響を受ける地域と、豊田市のように自動車産業を核として形成される地域とがあり、それぞれ特有の都市構造や発達の過程を持つ。

本図幅においては、いずれのDIDも1960年には自然堤防や台地に位置していたが、1980年には台地および丘陵地へ拡大することが特徴である。低地におけるDIDは主に豊田市街のある豊田盆地で、その他の河川沿いの低地にはみられない。

5 調査地域の災害履歴概要

5.1 災害履歴概説

(1) 地震

愛知県に被害を及ぼす地震には、①南海トラフ沿いで発生する海溝型巨大地震、②陸域の浅い場所で発生する地震の2タイプが存在する。

①のタイプは太平洋沖合のプレート境界で発生する地震で 1854 年の安政東海地震 (M8.4) や 1944 年の東南海地震 (M7.9) が該当し、広い範囲に揺れや津波による被害をもたらす。

②のタイプは陸域の活断層によってもたらされる地震で 1586 年の天正地震 (M7.8)、1891 年の濃尾地震 (M8.0) や 1945 年の三河地震 (M6.8) などが該当する。

1854 (嘉永 7) 年 12 月 23 日に発生した安政東海地震は、熊野灘から駿河湾にかけてを震源域としたプレート境界型地震と考えられており、駿河湾沿岸から遠州灘沿岸にかけて震度 6~7 の揺れが生じたと推定されている。名古屋市では震度 6 相当と推定されている。またこの地震の 32 時間後には紀伊半島沖から四国沖にかけての南海トラフを震源域とする安政南海地震 (M8.4) が発生している。

天正地震は 1586 (天正 13) 年 1 月 18 日に発生し、岐阜県の全域、富山県西部、滋賀県東部、名古屋市など広範囲で震度 6 相当の揺れが生じたと推定されている。この地震の際に、阿寺断層帯主部 (南部) が活動した可能性がある (地震調査研究推進本部, 2009)。

(2) 風水害

本図幅範囲は濃尾平野の沖積低地より連なる東山丘陵をはじめ、隣接する台地・丘陵地に位置し、矢作川や逢妻女川、境川などの中小の河川が北西から南東方向に流下している。過去にはこれら中小河川の流域で氾濫被害を度々生じているほか、東側の丘陵部では土砂災害も発生している。

5.2 災害履歴詳説

(1) 地震

①濃尾地震

明治 24 (1891) 年 10 月 28 日午前 6 時に発生した濃尾地震 (M8.0) は過去日本の内陸で発生した最大級の地震である。濃尾地震によって福井県南部から岐阜県根尾村を経て木曾川まで複数の地表地震断層が出現し、根尾谷地震断層帯と呼ばれている。これらの断層は水平変位を主成分とする横ずれ断層で、もっとも顕著な根尾谷断層では数mから最大 8m 左横ずれしている。濃尾地震の断層モデルとしてはこれら地表に現れた横ずれ断層のみを想定するモデルと、濃尾平野の地下の伏在断層を組み合わせるモデルの二つが提示されているが、濃尾平野の地下伏在断層の認定には必ずしも決着がつかない (内閣府, 2005)。

濃尾地震の震動は北海道や南西諸島を除く全国で観測され、震源断層から濃尾平野にかけて震度 7、福井県、岐阜県、滋賀県、愛知県、三重県の広い範囲で震度 6 の揺れが

生じたと推定されている。濃尾地震の死者は7,273名、住家全壊14万棟、半壊8万棟以上と推定されている（宇佐美，2003）。

愛知県では、震度6～7、死者2,638名、住家全壊85,511棟、半壊55,655棟で、県の地震災害史上最大の被害を受けた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では西側の春木村（現東郷町）、沓掛村、東明村（現東明市）、高社村（現名古屋市名東区）、植田村（現名古屋市天白区）で数%の建物が全壊被害を生じている。

② 東南海地震

昭和19（1944）年12月7日午後1時に発生した東南海地震（M7.9）は、駿河トラフと南海トラフ沿いを震源域として発生し、三重県から静岡県御前崎町までの沿岸域で震度6弱となった。また伊豆半島から三重県沿岸部にかけて津波による被害も発生している。この地震による被害は飯田（1977）の推計によると全国で死者・行方不明者1,223名、住家全壊17,611棟、半壊36,565棟を数える。特に愛知県は最も甚大な被害を受け、死者・行方不明者438名、住家全壊6,411棟、半壊19,408棟となった（地震調査研究推進本部，2009）。

本図幅範囲では南西部の刈谷町（現刈谷市）で4%ほどの建物が全壊被害のほか、富士松村（現刈谷市）、三好村（現みよし市）で10～20%の建物が半壊被害を生じている。

③ 三河地震

東海地方を中心として広い範囲に被害を与えた東南海地震の約1ヶ月後の昭和19（1944）年1月13日午前3時38分に愛知県東部を震源とする内陸直下型地震である三河地震（M6.8）が発生し、地表に現れた断層は10数kmにも渡った（内閣府ホームページより）。

愛知県では、大部分で震度5以上、死者2,306名、住家全壊16,408棟、半壊31,679棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

三河地震の被害は現在の西尾市を中心とした幡豆郡と、現在の安城市を中心とした碧海郡に集中している（飯田，1995）。

本図幅範囲では南西部の安城町（旧安城市）で10%を超える建物が半壊被害のほか、刈谷町、富士松村（現刈谷市）、知立町（現知立市）、高岡村（現豊田市）で5～8%の建物が半壊被害を生じている。

(2) 水害

① 昭和47（1972）年7月12日（集中豪雨）

7月3日～6日にかけて、黄海から日本海北部に伸びた前線を伴った低気圧に暖湿気流が流れ込み、九州と四国に局地的な大雨をもたらした。9日～13日にかけては前線が南下し、本州南岸から四国、九州付近に停滞した。日本南海上には台風6,7,8号があり、この影響で前線が活発化し、西日本で400～600mm、山間部で1,000mm前後の大雨となった。名古屋地方气象台で7月11日に日降水量93.5mmを記録し、7月3日～15日の期間降水量は331mmに達した（気象庁ホームページより）。また、愛知県では西三河を中心に被害を生じ、死者64名、行方不明者4名、住家全壊16棟、半壊70棟、住家浸水

床上 20,075 棟、床下 12,077 棟が報告されている（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では矢作川流域や境川流域で洪水被害が発生しており、矢作川流域では藤岡村（現豊田市）、小原村（同左）、豊田市など西三河を中心に浸水被害を生じている。

豊田市では死者 64 名、行方不明者 4 名、住家全壊 271 棟、半壊 287 棟、住家浸水床上 20,075 棟、床下 12,077 棟の被害があった（豊田市地域防災計画）。

② 昭和 51（1976）年 9 月 8 日（台風 17 号）

9 月 8 日にトラック島周辺に発生した台風 17 号は北西に進み 10 日～12 日朝にかけて九州の南西海上で停滞した。その後北上し 13 日 1 時 40 分ごろ長崎市に上陸した後、日本海を北上した。台風 17 号と前線の影響で各地に大雨をもたらし、九州から中部地方にかけて期間降水量が 500mm～1,000mm に達した。名古屋地方気象台で 9 月 12 日に日降水量 161.5mm を記録し、9 月 8 日～14 日の期間降水量は 422.5mm に達した（気象庁ホームページより）。

愛知県では尾張、海部、知多に中小河川氾濫等により死者 1 名、住家全壊 14 棟、半壊 437 棟、住家浸水床上 13,050 棟、床下 102,677 棟の被害が発生した（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では境川流域などで浸水被害を生じており、刈谷市で住家浸水床上 80 棟、床下 376 棟の被害があった（刈谷市地域防災計画）。

③ 平成 12（2000）年 9 月 11 日（台風 14 号：東海豪雨）

9 月 2 日にマリアナ近海で発生した台風 14 号は 16 日に沖縄本島を通過し、その後日本海で温帯低気圧に変わった。この台風によって本州付近に停滞していた前線が活発化し、愛知・三重・岐阜の東海地方を中心に記録的な大雨となった。愛知県では名古屋地方気象台で 9 月 11 日に観測史上最高の日降水量 428mm を記録し、9 月 8 日～17 日の期間降水量は 617mm に達し、名古屋市では 38 万人に避難勧告が出された（気象庁ホームページより、佐藤，2002）。

愛知県内の庄内川、新川・天白川では計画高水位を超える過去最高の水位を記録し、庄内川の枇杷島地点では 12 日 4 時半に計画高水位の 9.18m を上回る 9.46m を記録した。庄内川下流の一式大橋右岸で越水したが破堤には至らなかった。庄内川の支流の新川では河口から 16km の名古屋市西区芦原町付近で左岸堤防が 100m にわたって破堤し浸水面積 19 平方 km、浸水家屋約 18,000 棟の被害を生じた（国土交通省ホームページより）。愛知県では河川の破堤 20 箇所、越水 319 箇所、死者 7 名、住家全壊 18 棟、半壊 154 棟、住家浸水床上 22,078 棟、床下 39,728 棟の被害があった（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では境川流域や逢妻女川流域、矢作川流域などで浸水被害を生じ、豊明市では、正戸川、皆瀬川で破堤、井堰川等では護岸崩壊も発生し、多数の床上・床下浸水等の被害を受けた（豊明市地域防災計画）。

④ 平成 20（2008）年 8 月 28 日（豪雨）

8 月 28 日に本州付近に停滞する前線に向かって南から暖かく湿った空気が入り込み、大気の状態が不安定となって東海、関東、中国、東北地方などで記録的な大雨になった。

愛知県岡崎市では 29 日の 1 時間降水量が 146.5mm、一宮市では 120mm、名古屋市千種区で 84mm を記録するなど短時間に局地的な大雨となった（気象庁ホームページより）。

愛知県では、広田川で破堤、死者 2 名、住家全壊 5 棟、半壊 3 棟、住家浸水床上 2,480 棟、床下 14,106 棟の被害を生じた（愛知県地域防災計画）。

本図幅範囲では名古屋市名東区で浸水害が発生し、名古屋市全体では住家浸水床上 1,175 棟、床下 9,929 棟の被害があった（名古屋市地域防災計画）。

(3) 地盤沈下

濃尾平野の地盤沈下は昭和 34 年の伊勢湾台風による高潮被害がゼロメートル地帯に大きな被害を及ぼしたことをきっかけに注目されるようになった。濃尾平野では特に干拓地の造成・土壌改良に伴う大量の地下水のくみ上げなどによって帯水層中の水量が減少し、地盤の沈降が起こったと考えられている。昭和 40 年代後半には 10cm/年以上の沈下が広範囲にわたって認められ、その後国・自治体などによって制定された地下水汲みあげに関わる規制の効果によって、昭和 48～49 年をピークに昭和 50 年代半ば以降は沈静化傾向にある（環境省ホームページより）。

なお本図幅範囲では顕著な地盤沈下は観測されていない。

6 調査成果図の見方・使い方

6.1 地形分類図

(1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、埋立て前の海岸線の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようになっている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

分類		定義
山地・ 火山地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩屑または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
低地	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる扇状の堆積地域。
	緩扇状地	上記の扇状地のうち、傾斜が緩やかな地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

(2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況（自然地形）がわ

からなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に 0.5m 以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に平坦化した土地。

(3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害	
自然地形が分布する地域	山地	山地斜面	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。	急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。	谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性がある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。
	台地	砂礫台地（更新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。	通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することがある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することがある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることが有効である。
		扇状地 緩扇状地	一般的に地盤は良好であるが、末端部では液状化の可能性はある。	豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性がある。
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。	洪水時に冠水するが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。	異常な洪水時に浸水することがあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。	明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することがある。
	低地	湿地	地震の揺れが増幅され、地盤変異の可能性はある。	盛土の状況により違いはあるが、洪水時には排水がきわめて悪く、長時間湛水する可能性がある。
		人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。
		改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。
		谷底低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、洪水時に浸水することがあるが、概ね排水は速やかである。
	低地	氾濫原低地の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		旧河道、湿地等の盛土地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。	十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。	切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。		
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。		

6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 120 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 120 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在か

ら概ね40年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治・大正期、昭和期の2時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に2時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひぎまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ2m以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が2m未満であっても森林とする。高さ2m以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごとに分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺1/50,000（図上の1cmが現地の500mに相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化、斜面崩壊等の地震災害の、大きく2つが考えられる。特に、本図幅内では人工改変の進んだ山地・丘陵地が多いことから、斜面崩壊や地すべり等土砂災害に留意することが必要である。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。本図幅においては、地理的には名古屋市の通勤圏に含まれ、地形的には改変工事中や未改変の緩傾斜地がまだ多く残っており、これからも開発余地がある地域といえる。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓斜面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にとまなう行政職員の減少や防災関連費用の削

減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

7 引用資料及び参考文献

7.1 引用資料

本調査成果図等の作成にあたっては、以下の資料、文献等を引用または参照した。

(1) 人工地形及び自然地形分類図

- ①「自然地形分類図」は、2万5千分の1土地条件図「岡崎」（国土地理院、1967）「豊田」（国土地理院、1968）を基礎資料として、以下の既存資料を参考に、空中写真の補足判読により修正・編集した。

国土地理院（1967）：2万5千分の1土地条件図「岡崎」。

国土地理院（1968）：2万5千分の1土地条件図「豊田」。

愛知県（1972）：5万分の1土地分類基本調査（地形分類図）「豊田」

判読に利用した空中写真は、

M197-A-3（複）（昭 21.7.16 米軍撮影）、M198-A-1（複）（昭 21.7.18 米軍撮影）、M624（昭 22.11.3 米軍撮影）、M724（昭 23.1.8 米軍撮影）、M1097-A（昭 23.6.4 米軍撮影）、M1245-A（昭 24.3.8 米軍撮影）、M4-17-12（昭 27.4.17 米軍撮影）

- ②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「平針」（平成 17 年更新）「豊田北部」（平成 22 年更新）「豊田南部」（平成 22 年更新）「知立」（平成 22 年更新）の読図及び空中写真（CCB-2000-1X、国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成 12 年時点の地形の状況を反映している。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（名古屋大学名誉教授・奈良大学教授）、藤本 潔（南山大学教授）、堀 和明（名古屋大学准教授）の各氏のご指導をいただいた。

(2) 土地利用分類図

「土地利用分類図」は、現在から約 120 年前（1890 年頃）及び約 40 年前（1970 年頃）の 2 時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を 5 万分の 1 の縮尺精度に編集したものである。「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

【第 1 期（明治期、1891 年頃）】

5 万分 1 地形図「舉母村」明治 24 年測図（明治 32.9.30 発行）

5 万分 1 地形図「名古屋」明治 22 年測量（明治 25.4.28 発行）

【第 2 期（昭和期、1970 年頃）】

5 万分 1 地形図「豊田」昭和 46 年編集（昭和 47.2.28 発行）

なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成 11 年修正）である。

(3) 災害履歴図

災害履歴図の作成にあたっては以下の資料を引用した。

【水害】

① 1972年7月水害

- ・昭和47(1972)年7月降雨(集中豪雨)による浸水区域を、愛知県(2001)『境川流域浸水実績図(昭和46年8月豪雨、昭和47年7月豪雨、昭和51年9月豪雨、平成3年9月台風18号、平成12年9月豪雨)』、愛知県(2001)『矢作川流域浸水実績図(昭和46年8月豪雨・昭和47年7月豪雨・平成3年9月台風18号・平成12年9月豪雨)』より編集。

② 1976年9月水害

- ・昭和51(1976)年9月降雨(台風17号)による浸水区域を、愛知県(2001)『境川流域浸水実績図(昭和46年8月豪雨、昭和47年7月豪雨、昭和51年9月豪雨、平成3年9月台風18号、平成12年9月豪雨)』、愛知県(2001)『昭和49年7月豪雨、昭和50年7月豪雨、昭和51年9月豪雨、平成3年9月台風18号、平成12年9月豪雨 浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』より編集。

③ 2000年9月水害

- ・平成12(2000)年9月降雨(台風14号:東海豪雨)による浸水区域を、愛知県(2001)『境川流域浸水実績図(昭和46年8月豪雨、昭和47年7月豪雨、昭和51年9月豪雨、平成3年9月台風18号、平成12年9月豪雨)』、愛知県(2001)『昭和49年7月豪雨、昭和50年7月豪雨、昭和51年9月豪雨、平成3年9月台風18号、平成12年9月豪雨 浸水実績図(矢田川・内津川・八田川・堀川・天白川・山崎川・郷瀬川流域)』、愛知県(2001)『矢作川流域浸水実績図(昭和46年8月豪雨・昭和47年7月豪雨・平成3年9月台風18号・平成12年9月豪雨)』より編集。

④ 2008年8月水害

- ・平成20(2008)年8月降雨(豪雨)により浸水区域を、名古屋市(2010)『(平成22年度)名古屋市水防計画付図(名古屋市浸水実績図)』より編集。

【土砂災害】

① 1976年9月災害

- ・昭和51(1976)年9月降雨(台風17号)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

② 1991年9月災害

- ・平成3(1991)年9月降雨(台風18号)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

③ 1999年6月災害

- ・平成11(1999)年6月降雨(梅雨前線豪雨)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

④ 2000年9月災害

- ・平成12(2000)年9月降雨(台風14号:東海豪雨)による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

⑤ 2008年8月災害

- ・平成 20（2008）年 8 月降雨（豪雨）による土砂災害発生箇所を、愛知県砂防課提供資料より編集。

【地震被害】

① 1891 年濃尾地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『明治 24 年 10 月 28 日濃尾地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江（2011）『日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM 付き）』より転載。

② 1944 年東南海地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、『若松加寿江（2011） 日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM 付き）』より転載。

③ 1945 年三河地震被害

- ・建物被害は、飯田汲事（1985）『昭和 20 年 1 月 13 日三河地震の震害と震度分布』より転載。
- ・液状化被害は、若松加寿江（2011）『日本の液状化履歴マップ 745-2008（DVD-ROM 付き）』より転載。

【地盤沈下】

- ・地盤沈下量は、中部地方整備局『東海三県地盤沈下調査会 地盤沈下データ』により編集（名古屋市の区域等）。

なお、各地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の 5 万分の 1 地形図、空中写真、数値地図 50000（地図画像）、数値地図 25000（土地条件）及び基盤地図情報を使用した。（承認番号 平 24 情使、第 534 号）

7.2 参考文献

本説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした。

(地形・土地利用)

- 愛知県(1985) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「桑名・名古屋南部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 愛知県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「津島・名古屋北部」, 愛知県企画部土地利用調整課.
- 愛知県(1999) 猿投山断層帯に関する調査成果報告書 愛知県
<http://www.hp1039.jishin.go.jp/danso/Aichi3Bfrm.htm>
- 太田陽子・貝塚爽平・加藤芳朗・桑原 徹・白井哲之・土 隆一・山田 純・伊藤通玄(1963) 三河高原およびその西縁の段丘群〔短報〕. 地理学評論, 36, 617-624.
- 奥部雪絵・熊谷 雄・吉田友彦・三宅 醇(1999) 愛知県における市街化区域内土地改良事業地区に関する研究: その1 土地区画整理事業と土地改良事業の施行過程の相違点. 日本建築学会東海支部研究報告集, 37, 857-860.
- 春日井団研グループ(1971) 春日井市付近の地形面. 竹原平一教授記念論文集, 153-161.
- 活断層研究会(1980) 日本の活断層, 東京大学出版会.
- 活断層研究会(1991) 新編日本の活断層, 東京大学出版会.
- 環境庁(1981) 1/50,000 現存植生図「豊田」, 第2回自然環境保全基礎調査(植生調査). 環境庁.
- 岐阜県(1984) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「岐阜」, 岐阜県企画部土地対策課.
- 岐阜県(1986) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「瀬戸・明智・根羽」, 岐阜県企画部土地対策課
- 経済企画庁(1972) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「豊田」, 経済企画庁.
- 経済企画庁(1974) 地形分類図, 20万分の1土地分類図「愛知県」, 経済企画庁.
- 国土交通省(2011) 1/50,000 土地分類基本調査(土地履歴調査)説明書「岐阜」「瀬戸」「名古屋南部」「豊田」. 国土交通省国土政策局国土情報課.
- 国土庁(1975) 地形分類図, 20万分の1土地分類図「岐阜県」, 国土庁.
- 国土地理院(1975) 土地条件調査報告書(濃尾地区). 国土地理院技術資料D-21.
- 国土地理院(1968a) 1/25000 土地条件図(中京地区). 国土地理院技術資料D-4.
- 国土地理院(1968b) 1/25000 土地条件図「豊田」. 国土地理院技術資料D-4.
- 国土地理院(1968c) 1/25000 土地条件図「岡崎」. 国土地理院技術資料D-4.
- 国土地理院(2004) 1/25000 都市圏活断層図「豊田」. 国土地理院.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004) 屏風山・恵那山断層帯及び猿投山断層帯の長期評価について.
http://www.jishin.go.jp/main/chousa/04oct_byoubu/index.htm
- 須貝俊彦(1990) 赤石山地・三河高原南部の侵食小起伏面の性質と起源. 地理学評論, 63(12), 793-813.
- 須貝俊彦(1995) 木曾山脈・美濃三河高原北部における山頂小起伏面の起源. 東京大学教養学部人文科学科紀要, 101, 1-40.
- 須藤定久・内藤一樹(2000) 瀬戸市周辺の陶磁器と窯業原料資源, 地質ニュース, 552, 30-41.

- 富田啓介(2012) 湧水湿地をめぐる人と自然の関係史 —愛知県矢並湿地の事例—. 地理学評論, 85(2), 85-105.
- 豊田加茂環境整備公社(2012) 埋立状況報告, WASTE&ENVIRONMENT NEWS (廃棄物と環境), 88.
<http://www.tes.or.jp/kikanshi-honbun/88/newpage1.htm>
- 中江 勝(1991) 日本のみかげ石山地について. 地質ニュース, 441, 22-27.
- 日本地誌研究所(1969) 日本地誌 12 愛知県・岐阜県. 二宮書店.
- 浜 英彦(1989) 人口集中地区, 地理学辞典改訂版. 二宮書店, 319.
- 春山成子・大矢雅彦(1986) 地形分類を基礎とした庄内川, 矢作川の河成平野の比較研究. 地理学評論, 59(9), 571-588.
- 平岡昭利・野間晴雄(2000) 地図で読む百年 中部1. 古今書院.
- 町田 貞・太田陽子・田中真吾・白井哲之(1962) 矢作川下流域の地形発達史. 地理学評論, 35(10), 505-524.
- 町田 洋・海津 正倫・松田 時彦・小泉 武栄(2006) 日本の地形5 中部. 東京大学出版会.
- 森 肅・山本和夫・栗本 謙・高橋正紘・田中清人(1972) 豊田市域の地盤について(その1): 地形および地質について. 日本建築学会, 東海支部研究報告集(10), 117-120.
- 森 忍(1971) 名古屋市東部の瀬戸層群矢作川累層. 地質学雑誌, 77(10), 635-644.
- 森山昭雄・小沢 恵(1972) 矢作川流域の沖積平野の地形と沖積層について. 第四紀研究, 11(4), 193-207
- 森山昭雄・小沢 恵(1972) 矢作川流域の沖積平野の地形と沖積層について. 第四紀研究, 11(4), 193-207
- 森山昭雄(1983) 瀬戸市およびその周辺地域の陶土・珪砂採掘鉱山の人工地形. 地理学評論, 56(4), 243-261.
- 森山昭雄(1987) 木曾川・矢作川流域の地形と地殻変動. 地理学評論, 60(2), 67-92.
- 山口恵一郎・沢田 清・清水靖夫・佐藤 侑・中島義一(1974) 日本図誌大系中部I. 朝倉書店.
- 吉田友彦・奥部雪絵・熊谷 雄・三宅 醇(2000) 愛知県における市街化区域内土地改良事業地区の発生状況. 日本建築学会計画系論文集, 527, 209-215.

(災害履歴調査)

- 愛知県(2010)「愛知県史 別編 自然」.
- 愛知県(2011)「愛知県地域防災計画」.
- 飯田没事(1985) 明治24年10月28日濃尾地震の震害と震度分布. 飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌 (飯田没事教授論文選集).
- 飯田没事(1985) 昭和19年12月7日東南海地震の震害と震度分布. 飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌 (飯田没事教授論文選集).
- 飯田没事(1985) 昭和20年1月13日三河地震の震害と震度分布. 飯田没事 1985 東海地方地震・津波災害誌 (飯田没事教授論文選集).
- 井口隆(2002) 2000年9月東海豪雨による土砂災害の発生状況. 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 177-195.
- 宇佐美龍夫(2003) 最新版日本地震被害総覧 416-2001. 東京大学出版会, 605p.
- 刈谷市(2011)「地域防災計画」.

環境省 水・大気環境局 (2011) 平成 22 年度 全国の地盤沈下の概況.

佐藤照子 (2002) 2000 年東海豪雨災害における都市型水害被害の特徴について. 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 99-162.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2009) 日本の地震活動ー被害地震から見た地域別の特徴. 第 2 版, 496p.

鈴木真一 (2002) 2000 年 9 月に東海地方で発生した豪雨のメソ α スケールの特徴について. 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 5-16.

瀬尾佳美・佐藤照子 (2002) 都市型水害としての東海豪雨災害: 意識調査報告. 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 163-176.

高村博・西口哲夫・木下武雄・富永雅樹・福囿輝旗・大倉博 (1977) 1976 年台風第 17 号による長良川地域水害調査報告. 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 12, pp. 1-92.

東海三県地盤沈下調査会 (2012) 平成 23 年における濃尾平野の地盤沈下の状況.

豊明市 (2011) 「地域防災計画」.

豊田市 (1981) 「豊田市 九巻 (資料)」.

豊田市 (2010) 「地域防災計画」.

内閣府 (2005) 中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書 【地震・津波災害】 1854 安政東海地震・安政南海地震.

内閣府 (2005) 中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」第 1 期報告書 【地震・津波災害】 1891 濃尾地震.

中根和郎 (2002) 東海豪雨における豪雨と中小河川水位の関係, 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 17-98.

名古屋市 (2010) 「地域防災計画」.

米谷恒春 (2002) 東海地方豪雨災害の概要, 防災科学技術研究所 主要災害調査, No. 38, pp. 1-4.

若松加寿江 (2011) : 日本の液状化履歴マップ 745-2007 (DVD+解説書), 東京大学出版会, 90p.

環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ (平成 22 年度版)」
(http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h22/index.html) (平成 23 年)

気象庁ホームページ「気象統計情報」
(<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)

気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html>)
(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index2.html>) (平成 23 年)

国土交通省中部地方整備局庄内川河川事務所「9.12 災害の概要」
(<http://www.cbr.mlit.go.jp/shonai/tanto/kasen/suigai/shonai/2000/gaiyo.html>)

資 料

災害年表（地震災害）

災害年表（風水害）

資 料

災害年表（地震災害）

災害年表（水害）

災害年表(地震災害)

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		愛知県	出典
715年7月5日 (霊龜1年5月26日)	三河	34 4/5	137.4	M6.5~ 7.0	正倉47破潰、百姓の廬舎陥没したものあり、三河の国府(現豊川)を中央にとる。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1498年9月20日 (明応7年8月25日)	東海道全般	34	138	M8.2~ 8.4	紀伊から房総にかけての海岸と甲斐で新道大きく、熊野本宮の社殿倒れ、那智の坊舎崩れ、遠江では山崩れ地裂けた。震害に比して津波の被害が大きく、津波は紀伊から房総の海岸を襲った。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1586年1月18日 (天正13年11月29日)	畿内・東海・東山・北陸諸道 (天正地震)	36.0	136.9	M≒7.8	飛騨白川谷の保木脇で大山崩れ、掃雲山城を含めて倒家埋没300余戸で死者多数。大垣、尾張、近江長浜、阿波でも被害があり、余震は翌年まで続いた。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001 ※参照 地震名称：日本の地震活動―被害地震から見た地域別の特長―
1605年2月3日 (慶長9年12月16日)	東海・南海・西海諸道 (慶長地震)	A33.5 B33.0	138.5 134.9	M7.9	2つの地震A、Bが生じたものと考えられる。震害の記録は見当たらないが、津波は犬吠岬から九州に至る太平洋岸に押し寄せ、家屋流失や死者などの被害が大きかった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001 ※参照 地震名称：国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」
1707年10月28日 (宝永4年10月4日)	五畿七道 (宝永地震)	33 1/5	136	M8.4	わが国最大級の地震の1つ。家屋倒潰地域は、駿河中央部・甲斐西部・信濃・東海道・美濃・紀伊・近江・畿内・播磨・大聖寺・富山、および中国・四国・九州に及ぶ。津波は伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸及び大阪湾・播磨・伊予・防長を襲った。三河・尾張で死者19人、家屋全潰8,573棟、破損・半壊5,918棟の被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1854年12月23日 (安政1年11月4日)	東海・東山・南海諸道 (安政東海地震)	34	137.8	M8.4	被害区域は関東から近畿に及び、震害の最もひどかったのは沼津から伊勢湾にかけての海岸で、倒潰率は10%以上、過半に達する宿も多かった。この地震による津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、大きな被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1854年12月24日 (安政1年11月5日)	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 (安政南海地震)	33.0	135.0	M8.4	この地震は安政東海地震の32時間後に起き、近畿地方及びその周辺での震害や津波の様子をはっきりと2つに区別できない。被害区域は中部から九州に及ぶ。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1891年10月28日 (明治24)	愛知県・岐阜県 (濃尾地震)	35.6	136.6	M8.0	仙台以北を除き日本中で有感。激震地域は根尾川・揖斐川上流地方。三河・尾張で死者 2,339、負傷者 4,594、家屋全潰 68,899に及ぶ。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事	
		北緯	東経		愛知県	出典
1944年12月7日 (昭和19)	東海道沖 (東南海地震)	33.8	136.6	M7.9	被害は静岡・愛知・岐阜・三重に多く、滋賀・奈良・和歌山・大阪・兵庫にも小被害があった。津波が伊豆半島から紀伊半島にかけて襲い、特に三重県・和歌山県の被害が大きかった。愛知県の被害は、死者461人、負傷者1,188人、住家全壊6,968戸、住家半壊19,676戸、非住家全半壊15,129棟、浸水家屋150。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1945年1月13日 (昭和20)	愛知県南部 (三河地震)	34.7	137	M6.8	とくに渥美湾岸の幡豆郡の被害が大きかった。振動は急激だったようで、福地・吉田・一色では全壊家屋が少なく、山地の室場・豊坂・三和・幡豆では多くなっている。小津波が発生、蒲郡で約1m、千間で30cmであった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001
1946年12月21日 (昭和21)	南海道沖 (南海地震)	33	135.6	M8.0	被害は中部地方から九州にまで及び、津波は房総半島から九州に至る沿岸を襲った。愛知県では、死者10名、負傷者19名、住家全半壊197戸の被害があった。	新編日本被害地震総覧 [416]-2001

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 江戸時代以前

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
和銅	2	709	7		東海道・近畿地方(長雨)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
和銅	6	713	11	27	三河・尾張では暴風のため、樹木が倒れ、農作物に被害があった。このため穀物は減収。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神亀	3	726			この年尾張に洪水があって、ききんとなり、飢民2,242戸に達した。遠江の5都も水害によりききん。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	1	767			この年、尾張に洪水があり、中島・海部郡に大被害が出た。ききんとなる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	3	769	9	17	木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島3郡が水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
神護景雲	3	769	10	15	木曾川の洪水により、葉栗・海部・中島の3郡に水害をこうむり、家屋浸水・水田を冠水。また、国府・国分寺(2寺)が流失し、大きな被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝亀	6	775	9	21	尾張・伊勢・美濃の3か国が暴風雨により、大被害を受けた。木曾川氾濫のため、沿川の地では、死者300余人、牛馬1,000余頭、国分寺・諸寺院19、その他家屋の被害は非常に多かった。	愛知県の気象(1961) 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
延暦	15	796	8		大雨・洪水があり、尾張では、ききんとなる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉祥	3	850			尾張に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
仁寿	4	854	3		尾張の河川が氾濫した。この年、沿川の地では水難に苦しみ、ききんとなる。なお、この年ごろから、河川上流山地の植樹が完成期に入った。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞観	8	866	5		尾張、長雨のため水害を被る。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
仁和	3	887	9	12	伊勢湾に高潮があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
長祿	2	1458	10	26	尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛正	6	1465	9	14	尾張・三河に暴風雨、洪水があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文明	18	1486	9	10	東海道・近畿諸国暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明応	1	1492	7	2	東海道・近畿諸国大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明応	5	1496	10	2	暴風雨・洪水があり、伊勢湾沿岸では高潮被害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
永正	14	1517	8	10	諸国、暴風、洪水被害あり。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	1	1532	9	26	洪水により、矢作川の支流・青木川・伊賀川(岡崎)の堤防が破壊された。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	9	1540	9	21	尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅敷では大被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	10	1541	9	11	尾張・三河、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天文	13	1544	8	7	三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、特に三河では、人や家屋の被害が甚大であった。尾張でも木曾川の氾濫により、起町に水害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘治	2	1556	10	4	尾張で小田井川(庄内川支流)が氾濫し、沿川の地域が浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元亀	1	1570	9	30	三河・遠江で特に家屋や農作物の被害が大きかった。尾張でも知多郡では、家屋の被害があった。	
元亀	2	1571	9	19	東海道・近畿諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天正	2	1574	8	28	尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天正	14	1586	8	9	木曾川が大洪水となり、尾張・美濃両国の沿川地域は大水害をこうむった。美濃国各務郡前渡村と尾張国葉栗郡草井村(現江南市内)の間から西で、河道が現在のように変わった。尾張の葉栗・中島両郡では激流が村里をつらぬいて、人や家を流し、新しい河道ができ、富田庄・三谷郷等は新河道となった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
文祿	4	1595	6	16	尾張・美濃、洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
慶長	1	1596	9	26	東海道・近畿諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	2	1597			庄内川の出水により、右岸が破堤した。また、木曾川の出水により、丹羽郡山那村(現扶桑町山那)の田畑・家屋に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	8	28	東海道・四国諸国、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	9	7	尾張・美濃・伊勢・近江、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	9	1604	9	28	尾張・伊勢・美濃、暴風雨。	愛知県の気象(1961)
慶長	10	1605	9	3	尾張・三河・美濃・伊勢・近江では、被害があったが、木曾川はあまり出水しなかった。	愛知県の気象(1961)
慶長	11	1606	6	30	東海道・関東諸国、暴風雨。三河では、ところどころで堤防が決壊したが、尾張・美濃では大して被害はなかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	12	1607	10	4	三河・尾張、(東海道諸国)、暴風雨・洪水。矢作川では、ところどころで堤防が決壊し、橋が落ちた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	13	1608	6	3	尾張・美濃、暴風雨・洪水。(東海道諸国、暴風雨・洪水)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	14	1609	9	7	尾張・三河・美濃、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	14	1609	9	14	三河に大雨があり、矢作川堤防が挙母村(現豊田市内)内で決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	15	1610	6	23・27	6月23日・27日・7月8日、木曾川が洪水。7月8日、西美濃で大雨。7月16日、三河に洪水。西三河(矢作川)では、慶長14年8月の出水よりも水位が約90cm低かった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	15	1610	7	31	長雨が続き、さらに大雨が降って、木曾川・庄内川、その他、尾張の各河川が出水して大氾濫した。・木曾川は、尾張側の堤防が、決壊した。犬山から、中島郡加賀野井(現一宮市)の間で数か所決壊した。・庄内川が氾濫して、流域の被害は甚だしかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	5		木曾川の尾張側堤防がところどころ決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	7	20	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨。朝、東風が強く、正午から16時ごろにかけて、暴風雨となった。特に伊勢・尾張・美濃で強く、伊勢湾では破船2・30隻、熊野灘で破船7・80隻の海難があった。津島には、立田村の堤防が破壊して、川水が浸入した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	7	24	尾張・美濃に洪水があった。立田村の堤防が決壊して、津島まで川水が浸入した。	愛知県の気象(1961)
慶長	17	1612	8	19	尾張・三河・近江・美濃に洪水があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	17	1612	9	26	近畿・東海道諸国、暴風雨。未明から午後にかけて、近江・伊勢・美濃・尾張では風が強く、西の吹き返しの風がとくに強かった。尾張では住家に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	6	4	近畿・東海道、大雨・洪水。5月31日から6月4日にかけて大雨が降り、4日夜には洪水となった。尾張・海東郡・勝幡では堤防が決壊し、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	6	19	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。18日に大雨が降り、19日には大洪水となった。尾張・美濃・近江・摂津・河内・和泉の6か国では、4月の水害に加えて被害が大きかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	7	10	近畿・東海道諸国・摂津・河内・美濃、長雨・洪水。摂津・河内・美濃では被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶長	19	1614	10	1	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。遠江・三河では風は強くなかった。名古屋城本丸天守の北東の石垣約140mがくずれた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	1	1624	8	12	庄内川・矢作川が氾濫した。庄内川右岸の東春日井郡上條村(現春日井市)地内で破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	3	1626	5	8	庄内川が氾濫し、生棚(現名古屋市北区内)では、数haの農地に土砂が流入した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	3	1626	9		庄内川が、東春日井郡上條村(現春日井市)地内で氾濫した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	4	1627	9	15	東海道・関東、大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛永	9	1632	10	1	16日間降り続いた大雨のため、庄内川が特に大增水し、枇杷島橋が流失した。本川では、成願寺・福德(現名古屋市)右岸の味鏡・大野木堤が決壊し、支川の五条川・合瀬川では、六ツ師・熊之庄(現北名古屋市)で破堤。このため、小田井・比良・平田(現名古屋市)、沖・九之坪(現西春村)の諸村をはじめ、尾張20か村が水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	10	1633	6	9	9日から16日まで、大雨が降り続き、木曾川の派川佐屋川(明治30年以降降川)が破堤して、尾西地方一帯に浸水した。田畑の被害は約3万石に達した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	11	1634	7		尾張では、長雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	13	1636	9	12	尾張・三河・京都・近江、暴風雨・洪水。伊勢湾・三河湾に高潮がおこった。高潮により、熱田の海岸堤防が決壊して、新田に被害があり、道路は交通途絶した。名古屋城にも被害があった。三河吉田(現豊橋市)の船町の住家の大半が流失し、死者が出た。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛永	14	1637	9	25	東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正保	2	1645			矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正保	3	1646	9	14	矢作川が出水氾濫した。矢作川は数日來の雨で増水し、14日午後には水勢がにわかに加わり、夕方、碧海郡六ツ美村上青野(現岡崎市)西の堤防約4・50mが決壊して、氾濫した。寺院・民家約20軒が流失し、死者14・5人、田畑は不毛の地となった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶安	3	1650	9	26	九州・近畿・東海道諸国、大雨・洪水。木曾・長良・揖斐の三川が大出水し各所で破堤した。特に美濃の沿川地方では大被害をこうむった。これをく大寅の洪水とよぶ。尾張では、木曾川堤防が加賀野井(現一宮市)で決壊した。また、佐屋川堤防が決壊して、海東・海西郡へ流入し、尾西地方一帯の住家・田畑に大被害があり、多数の人・馬が死んだ。(尾張領の田畑被害20万石)この洪水以降、尾張の御囲堤はますます強固にされた。このほか、三河でも出水があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
慶安	4	1651	9	18	尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・海東・海西部では佐屋川の大出水により、家屋が流失し、多くの人・馬が死んだ。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
承応	2	1653	6	30	東海道、暴風雨。30日夜半から翌朝にかけて、暴風雨となった。名古屋城・犬山城に被害があり、尾張領内の民家の被害は、22,000軒におよび、人・馬の死ぬもの多数だったという。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
承応	2	1653	9	27	中国・東海道諸国、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明暦	1	1655	9	9	東海道諸国(三河から関東南部)、暴風雨。矢作川が拳母村(現豊田市)内で破堤した。三河吉田城(現豊橋市)も風雨と落雷で大被害。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	1	1658	8	31	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水。おもに近畿地方に風水害。尾張・三河での被害については不明。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	6		尾張・美濃、雷雨・洪水。諸国、長雨・洪水。連日、大雷雨があり、尾張・美濃では水害や落雷による被害が多かった。7月21日には、雷雨がはげしく、住家・田畑の浸水、破堤などの水害があり、名古屋城では、落雷による被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	8	12	諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、12日明方から暴風雨となり、住家の風による被害が大きかった。名古屋から江戸へ向かう途中の大船8隻が破船。また、美濃大垣付近でも水害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	9	24	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万治	3	1660	10	24	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨。名古屋では、城内および城下に建物、住家の被害があり、堀川には海水が逆流して、白鳥の材木が多く流された。尾張全般の家屋・田畑に風水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛文	4	1664	11		三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛文	6	1666	8	16・17・28・29	尾張・美濃、大雨・洪水。各河川が出水したが、特に庄内川は大出水した。尾張各所の田畑が水害を受けた。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛文	6	1666	8	30	尾張・美濃、暴風雨・洪水により、大水害をこうむった。死者6名、家屋流失・倒壊245軒。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	2	1674	9	15	九州・四国・中部・関東諸国、暴風雨・洪水。木曾川の洪水で美濃・尾張の沿川地方は大水害となった。人よんでく小寅の洪水>という。庄内川右岸破堤。(被害については不詳)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	4	1676	8	13	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張藩領内で農地浸水、田(442,634石相当)、畑(約2,023ha)、家屋流失2,417戸、死者18人、水死した馬30頭の風水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	6	1678	9	19	九州・四国・東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・美濃、水害。尾張藩領内では、田畑(85,600石余相当)、堤防約4,600m、家屋68戸に被害があり、3人と馬3頭が水死した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
延宝	7	1679	8	6・21	中国・中部諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天和	1	1681	9	2	伊勢・尾張・北陸諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害があった。このあと、18日の暴風雨とあわせて、この年、田畑の被害が大きかった。(ききんとなる)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天和	1	1681	9	18・25	18日尾張・江戸等、25日伊勢・尾張諸国、暴風雨。尾張では、8月とこの2回の暴風雨が田畑の農作物へ与えた被害は大きく、ききんとなった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	3	1686	3	17	尾張では、夕方雷雨がはげしく、名古屋城下で落雷により家屋1軒が焼失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	3	1686	8	28	尾張、雷雨。名古屋城下に落雷があり、建中寺に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	4	1687	10	1	庄内川が出水し、支川の矢田川で1人水死した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
貞享	4	1687	10	4	尾張、四国・近畿・北陸・東海道関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	4	1691	7	8	名古屋城下で落雷により1人死亡した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	7	1694	9	6	紀伊・尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	10	1697	7	27	名古屋城下に雷雨があり、落雷により家屋2軒焼失。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	10	1697	8	26	尾張に雷雨があり、落雷により、家屋2軒焼失、1軒破損した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	11	1698	12	28	尾張・三河、大雨・洪水。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	12	1699	7	27	尾張、前日夕方から、27日朝にかけて暴風雨となった。	愛知県の気象(1961)
元禄	13	1700	4	14	名古屋城下で落雷により、家屋1軒焼失。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	6	21	名古屋城下から熱田にかけて、突風・降ひょう(梅の実大)を伴ない、各所に落雷があり、熱田では突風により、家屋や樹木の被害もあった。22日夜には庄内川が出水し、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	8	2	尾張、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	9	11	連日の降雨で、尾張・美濃の諸川は出水氾濫し、堤防破損53か所におよんだ。庄内川水系では、五条川合流点(五条川は改修の結果、新川に合流するようになったが、天明以前は庄内川に合流)の杵(いり)、法界門(新川・甚目寺境)の堤防右岸が破堤し、甚目寺はじめ海部郡一帯が浸水した。この時勝川堤も破壊した。14日、名古屋では、昼前(09~12時ごろ)、昼過ぎ(15時ごろ)ごろと夜(19時ごろ)に雷を伴って雨が強く、天白川の堤防が鳴海の方へ決壊した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	14	1701	9	19	四国・近畿・東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・洪水。名古屋では、18日明方から風雨が強く、特に9時ごろから昼過ぎまで大雨となった。このため、各所で浸水し、田畑の被害も甚だしかった。また、矢田川堤防が稲生で決壊した。(庄内川・矢田川合流点の矢田川左岸、現名古屋市)。三河では大水害となり、岡崎では、矢作川堤防約900mが決壊し、田畑(2万石相当)に氾濫した。流失家屋32軒、倒壊家屋52軒、小橋3か所が落ちた。渥美郡泉村(現渥美町)では新田堤防約180m破堤。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
元禄	14	1701	10	1	尾張、暴風雨。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	8	21	四国・中国・尾張、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	9	20	尾張、暴風雨・洪水。佐屋川水系の海東郡津島の兼平堤が見越地内で破堤し、海部郡は大被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元禄	15	1702	11	20	名古屋付近に朝から昼過ぎにかけて(08時すぎ~12時すぎ)大雨が降り、名古屋の東郊は被害をこうむった。天白川堤防が破堤して、鳴海等へ氾濫した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	1	1704	7	19	三河・尾張・遠江、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市内)で庄内川右岸堤防が約180m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	2	1705	8	15	三河・尾張・遠江、暴風雨・洪水。岡崎藩領内では、矢作川堤防約1,800m、田(32,540石相当)、家屋倒壊270戸、流失家屋92戸、死者13人の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	3	1706	9		三河・尾張、大雨・洪水。東春日井郡和爾良村字御油東(現春日井市)で庄内川右岸堤防が約90m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	4	1707	9	14	尾張、暴風雨。明け方から夕方まで南東の風が強かった。(午後、最も強かった)	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	4	1707	10	6	尾張・四国・中国諸国、暴風雨・洪水。尾張では家屋の被害などがあつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝永	5	1708	8	17	近畿・東海道諸国、暴風雨・高潮・洪水・竜巻。こののちききんとなる。三河湾・伊勢湾に高潮があつたもよう。尾張・半田では新田の堤防が決壊した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	2	1712	9	18	近畿諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、家屋の倒壊が多かつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	2	1712	10		尾張・三河、暴風雨・洪水。家屋の倒壊が多かつたもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	3	1713	7	27	尾張、暴風雨・洪水。27日夜半、犬山城の天守閣が落ちた。家屋被害12,000戸。28、29日尾張西部から浸水し、家屋・人馬の被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM 天正14年(1586年)の洪水による木曾川河道の変遷と天正地震の影響について
正徳	4	1714	9	16	近畿・東海道・奥羽諸国、暴風雨・高潮・洪水・ききん。名古屋では午後(16時ごろ)から夜半にかけて暴風雨となる。庄内川が大出水し、味鏡堤(現名古屋市)が破堤して、氾濫した。伊勢湾沿岸に高潮がおこり海西郡愛知郡の新田(神戸・鳥ヶ地・甚兵衛・伝馬・大宝等)堤防を破堤した。尾張・三河とも家屋の倒壊、流失、死者、田畑の被害は甚大で、天和以来の暴風雨といわれる。こののち稲はみのらず、ききんとなる。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	5	1715	6	18	尾張、暴風雨・洪水。庄内川・矢田川が出水して、氾濫した。佐屋川(木曾川派川、のちに廢川)堤防が津島町付近で破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
正徳	5	1715	7	30	尾張に雷雨があり、落雷により、死者が出た。また、愛知郡中津村では住家が焼失した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	2	1717	9	19	東海道・関東・奥羽諸国、暴風雨・高潮。名古屋では、前夜から雨が降っていたが、朝(08時ごろ)から正午ごろまで南東の風雨が強くなり、屋根をふき破り、小屋をふき飛ばした。昼すぎ(13時ごろ)風向は南西にかわって、また強く被害が出た。尾張・三河ともに家屋・田畑等に風水害があつたもよう。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	3	1718	10	5	東海道諸国、暴風雨・高潮。尾張・三河は暴風雨となり、渥美湾に高潮がおきた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	4	1719	5	16	尾張・津島で落雷により、大木が折れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	6	1721	9	6	東海道諸国、暴風雨・洪水。尾張・三河は暴風雨になり、寛文以来の大洪水といわれ、庄内川が大出水して氾濫した。尾張藩領内の被害は田畑の損害高162,000石相当、堤防などの破損約4,000m、蛇籠(じゃかご)の破損流失約25,000m。家屋流失74軒、同倒壊659軒、杵(いり)の損失41か所。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
享保	7	1722	9	24	近畿・東海道諸国、暴風雨・洪水・高潮。尾張・三河の風水害は激甚で正徳4年9月以来の暴風雨といわれた。24日は朝から雨が降り続き、夜半(24時)ごろから南東の暴風雨となり、翌朝(06時ごろ)おさまったが、風が強くこれによる家屋の被害も大きかった。三河吉田(現豊橋市)から東では風はそれほど強くはなかったようである。伊勢湾・渥美湾の沿岸は高い高潮の来襲にあい、各新田をはじめ内陸部まで大打撃を受けた。また矢作川をはじめ、各河川が出水して、氾濫し、その水害を受けた。	愛知県の気象(1961)
享保	7	1722	12	15	尾張、強風雨。熱田では小舟20余隻が破損した。	愛知県の気象(1961)
享保	11	1726			知多方面、大雨・洪水。岩滑村(現半田市)内の川の堤防が決壊し、浜新田に荒廃地が生じた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	12	1727	5	3	夜、佐屋川(木曾川派川)が出水し、堤防が決壊し、海東・海西郡に氾濫した。麦作皆無となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	15	1730			碧海郡小川村(現安城市)では、干ばつと大雨・洪水により、農作物の収穫が減少した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	16	1731	9	10	矢作川堤防が、拳母村内(現豊田市)で破堤した。そのほかにも水害があったもよう(碧海郡木戸村(現安城市)に水害による木綿減収検見引の免状がある)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享保	20	1735	8	9	近畿諸国・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、小川村・木戸村(現安城市)などで水害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	1	1736	9	21	近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。(三河)17日、16時ごろから夜半(24時ごろ)まで、北風の暴風雨となり、矢作川が大出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	3	1738			尾張・三河、暴風雨・洪水。佐屋川(木曾川派川)堤防が海西郡赤目村(現八開村)で破堤し、田畑は水害を受けた。尾張・半田付近は大水害となった。英比川が決壊し、下半田全部が浸水、下半田・上半田ともに水田に損害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	4	1739	10	1	尾張、大雨・洪水。2日と3日の大雨により、庄内川堤防が萬場の南の左岸で破堤し、名古屋市西部一帯の稲葉地、中村以南がドロ海となった。また、山崎川の堤防も破堤した。(名古屋では、3日は夕方から22時ごろまで雷雨)。矢作川下流右岸の伏見屋新田で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	5	1740	9	6	矢作川・豊川その他の小河川が出水して、氾濫し、三河一帯に水害をこうむった。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元文	5	1740	9	12	尾張・三河、暴風雨。夜20時ごろから風が強くなり、夜半(24時ごろ)にはさらに強く、13日夜明けまで吹いた。家屋の倒壊、大木の倒れたものも多く、農作物の被害は大きかった。三河横須賀では住家の倒壊145戸、付属家、土蔵、へい、社寺等の被害が多数あった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛保	1	1741			木曾川が出水して、下流の鯛浦(現弥富町)で堤防が決壊した。十四山・飛島・永和各村の海岸部分は大水害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛保	2	1742	8	28	近畿・関東・東海・北陸諸国、暴風雨・洪水。矢作川が出水して、氾濫したもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛延	1	1748	10	9	三河、大雨・洪水。夜、矢作川が出水して、三河・額田郡能見村(現岡崎市)で堤防約50mが決壊した。他にも矢作川流域で水害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛延	3	1750	5	18	尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が大出水して、生棚(現名古屋市北区楠町内)で堤防が決壊し、土砂が数haの農地に流入した。また、八田川(庄内川支川)の堤防も一部破堤して、味鏡・如意(現名古屋市北区楠町)は浸水した。矢作川下流の伏見屋新田(現碧南市)も浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	1	1751	7	19	尾張・東春日井郡小牧村(現小牧市)から、北東の17か村に大雨が降って、山地から土石の流出が甚だしく、田畑を荒廃した。	愛知県の気象(1961)
宝暦	2	1752	6	13	矢作川右岸の中嶋・北野(現岡崎市)の堤防が破堤し、被害甚大であった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	3	1753	7	4	4日夜から5日の大雨で、5日夜佐屋川の津島神社の神領堤が約45m決壊し、付近の民家の軒まで浸水した。(水位としてはそれほど高いものではなかった)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	3	1753	9	13	夜、大雨が降り、中島郡・海東郡・海西郡の木曾川筋では洪水となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	4	1754	9	9	矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤し、下流でも氾濫があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	6	1756	10	24	矢作川が出水し、岡崎の伊賀川堤防が、伊賀八幡宮の前で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
宝暦	7	1757	5		東海道・関東・奥羽諸国、長雨・大雨・洪水・ききん。尾張・三河では、この年、2月中ごろから、雨がしばしば降り夏作は不作となる。4月中ごろからは、ことに雨天が多く(旧暦)4月27日から、5月5日ごろまでは、連日降り続き、なかでも5月2、3、4日は大雨が降って、3日・4日は大洪水となり、全般的に大水害をこうむった。<宝暦の洪水>	
宝暦	7	1757	7	30	30日大雨が降り、31日出水して、矢作川の堤防が決壊した。死者が多数出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	8	1758	6	30	三河、長雨・洪水・ききん。連日雨が降り続き各地に水害が発生した。前年の水害に続いて夏作は凶作となる。矢作川の川端堤が決壊し、国江村(現豊田市)などの田畑が埋没した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	8	1758	9	28	尾張、大雨・洪水。庄内川水系で堤防の決壊した所があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	11	1761	5	20	三河、大雨・洪水。矢作川の堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
宝暦	13	1763	10	8	尾張・三河、暴風雨。8日夜半から9日未明にかけて暴風雨となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	6	3	山城・尾張・三河・江戸、大雨・洪水。連日の雨で、4日庄内川が出水し、味鏡(現名古屋市北区楠町)付近で右岸堤防が決壊して氾濫し、西春日井郡如意・豊場から丹羽郡岩倉・五条川端にいたる尾張30余か村が水害をこうむった。三河では4日矢作川の拳母堤防が決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	8	21	三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	2	1765	9	16・17・21・22	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。尾張では連日の大雨で17日、庄内川が氾濫して、名古屋・熱田は一面に浸水し、東は奥田町から浜街道、西は佐屋街道から津島にいたる一帯が水害をこうむった。矢作川も拳母(現豊田市)で氾濫し、家屋80軒が流失、人が多く死んだ。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	3	1766	8	2	尾張、大雨・洪水。五条川が出水して、熊之庄(現北名古屋市)で堤防約10mが決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	3	1766	8	18	三河、大雨・洪水。矢作川右岸の渡刈堤防(現豊田市)が決壊して、家屋6戸が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	4	1767	8	4	尾張・三河、大雨・洪水・山津波。4日から6日にかけて大雨があり、6日夜、庄内川は右岸の比良・大野木(現名古屋市)、土器野松原(現新川町)などで破堤して、氾濫し、味鏡・如意など一帯がドロ海となる(宝暦の洪水と同様)。矢作川は猪子石で破堤し、名古屋の巾下門前まで氾濫。名古屋の北東部から西部にかけて低地全部が浸水。(長母寺北で山くずれ)。名古屋城西の道路上で水深1.5m余になり、数日間船で往来したという。このため、のち大幸川の開さく工事が行われた。名古屋南部は天白川の氾濫で、鳴海あたりまで浸水し、鳴海付近では、家屋の水害が大きかった。東海道上の水深は約1.8m。藩は舟を出して救助に努め、小屋を建てて、被災民の救済にあたった。この他、中島郡奥村などで木曾川の水が尾張側へ浸水したようである。同日、瀬戸の赤津や猿投山に山津波があった。矢作川では、渡村・下矢作片町・大門・日名・青木・細川・仁木入江・阿波寺等で破堤し、拳母・岡崎付近に浸水したほか、田畑の損害、人畜の死傷も多かった。また下流の伏見屋・平七新田(現碧南市)でも氾濫した。<明和の洪水>	
明和	4	1767	8	21	矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	5	1768	6		矢作川堤防が、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	8	1771	8	6	三河、大雨・洪水。岡崎の菅生川が門前組へ氾濫して、付近の家屋が浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	8	1771	8	19	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
明和	9	1772	8	30	東海道・関東諸国、暴風雨。尾張・半田では英比川の堤防が大破損した。江戸など東国の被害大。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	2	1773	8	7	伊勢・尾張・三河、暴風雨・洪水。尾張・三河では、7日0時ごろから暴風雨となる。矢作川が出水し、拳母村内(現豊田市)で破堤。岡崎・門前組破堤。橋の落ちたところもあった。矢作川流域では田畑に被害があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	2	1773	8	28	三河、大雨・洪水。矢作川出水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	3	1774	9	28	三河、大雨・洪水。矢作川堤防が拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
安永	3	1774	10	5	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	6	1777	9	21	尾張・三河で14時ごろから暴風雨となり(雷を伴う)、家を流したという。(不詳)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	8	1779	9	3	尾張・三河、暴風雨・洪水・竜巻。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安永	8	1779	9	29	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。29日から4日にかけて連日大雨。4日は暴風雨となり、東海道(尾張・三河)・関東・奥羽諸国、洪水となる。尾張では庄内川・天白川が、三河では矢作川が氾濫して、大水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	1	1781	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、右岸の和爾良村字北御油(現春日井市)で約270m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	2	1782	8	1	尾張、大雨・洪水・(凶作)。1日夜半(24時ごろ)、五條川左岸で、清洲村の朝日付近から下流へ8か所、また合瀬川が六ツ師村で2か所(約180m)、それぞれ破堤して、田畑に氾濫した。その後8月21日(陽暦9月27日)までに4回の出水氾濫があった。このため不作となる。この年尾張・三河をはじめ全国的に凶作となる。矢作川では、拳母村内で破堤。その後7月18日(陽暦8月26日)、7月23日(陽暦8月31日)にも出水した。	
天明	3	1783	5		津島付近に大雨が降り、天王橋が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	3	1783			尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。連日の大雨のため庄内川が出水し、大野木(現名古屋市区山田町)で堤防がくずれた。さらに暴風雨となり、決壊氾濫の危険が増したが、幸いに大事にいたらずにすんだ。そのほかにも尾張および三河南西部の各地に被害があったもようだが不明。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	4	1784	9	21	尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、和爾良・上條(現春日井市)で破堤氾濫した。浸水のため付近一帯に2、3日間は通行不能になった。また、鳴海から三河の知立あたりまで浸水して、東海道は海のようになり通行不能となる。各地の農作物が被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	5	1785	7	22	22日矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	5	1785	9	15	近畿・東海道、大雨・洪水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	3	15・26	尾張、大雨・洪水。冬にしては大雨が降り、15日夜佐屋川が増水して、津島神社神領の杵(いり)と工事中の堤防が、22時ごろ決壊した。また、28日夜にも同様決壊し、津島神社の床上まで浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	9	21	四国・中国・近畿・北陸諸国・尾張、暴風雨。尾張では、農作物の被害が大きかった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	6	1786	9	28	四国・中国・近畿・関東・奥羽諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。28日昼前から(10時ごろ)、尾張・三河では暴風雨となり、各河川は出水した。矢作川は拳母村内で破堤した。尾張・三河の農作物に大きな被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	7	1787	10	6	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	8	1788	7	20	三河、大雨・洪水。矢作川出水、碧海郡小川村(現安城市)付近でところどころ破堤して、田畑に氾濫し、被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天明	8	1788	9	24	三河、大雨・洪水。青木川(矢作川支流)が出水した(被害不明)。なお、土用中、雨が降り続き、その後もまた、7月下旬から8月中旬(陽暦8月下旬~9月中旬)まで雨が降り続いた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	1	1789	8	8	美濃・三河・遠江、大雨・洪水。矢作川が大出水して、拳母村(現豊田市)内の青木堤、宗定村などで破堤して、氾濫した。また、矢作古川でも破堤し、上流から下流にわたって氾濫したため被害が大きかった。岡崎藩の米の収納は前年より15,702俵減収であった。吉田藩でも14,263俵減収だったので、被害は大きかったものと考えられる(詳細不明)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	1	1789	9	26	東海道、暴風雨・洪水。庄内川が大出水して、東山畑(現名古屋市区楠町)で決壊し、また、矢作川の宗定堤(現豊田市上郷町)が2か所決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	2	1790	9	27	三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、青木堤・八町橋上の堤・そのほかの堤防が決壊した。岡崎付近が浸水し、家屋・田畑の被害が大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
寛政	3	1791	9	17	尾張・暴風雨・高潮・洪水。夕方前(16時ごろ)から暴風雨となり、夜半(23時ごろ)まで続いた。このため風による家屋の倒壊などの被害があったが、伊勢湾に高潮がおこり、海岸地方では死者94人、倒壊・流失家屋5,825軒におよぶ大きな被害となった。	愛知県の気象(1961)
寛政	4	1792	10	23	23日夜、尾張に暴風雨があったが、被害などは不明。	愛知県の気象(1961)
寛政	6	1794	7		矢作川が出水して、矢作右川の堤防が決壊した。被害甚大。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
寛政	7	1795	10	12	尾張では、樹木がたおれ、田畑に被害があった。	愛知県の気象(1961)
寛政	10	1798	5	23・29	美濃・伊勢・尾張、長雨・大雨・洪水。4月はじめからの長雨に加えて23日大雨となり、美濃では水害が甚大であった(尾張については不詳)。	愛知県の気象(1961)
寛政	10	1798	8	27	尾張、大雨・洪水。	愛知県の気象(1961)
寛政	11	1799	9	18	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	1	1801	9	16	尾張西部、雷雨・落雷・洪水。夜20時ごろから雷雨がおこり、中島郡起・小信(現一宮市)方面に10か所ほど落雷した。このとき、強雨を伴い、木曾川堤防がところどころでくずれた。奥村用の井げたを越水・古川が洪水のため、中島・小原・高野島・野府では浸水が甚だしかった。菟安賀新田では全戸、大平では3、4戸を残してほとんど、また東西西城・富田・今村もそれぞれ浸水した。古川通り下流の法立・丸淵辺も11日堤防が決壊した(現一宮市内の被害)。	
享和	1	1801	9	18	三河、大雨・洪水。菅生川・青木川(矢作川支川)のところで、堤防が決壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	2	1802	7	26	尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。熱田新田をはじめ伊勢湾沿岸では高潮により、家屋が流され死者も多かったという。岡崎城内や額田郡久後村(現岡崎市)は水害を受け、岡崎の殿橋は半壊した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	2	1802	9	2	三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、3日拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
享和	3	1803	9	30	尾張・三河、大雨・洪水。30日夜大雨となり、扇川・大高川(天白川支川)が出水、堤防が6か所(約280m)が決壊し、大高で倒壊家屋2軒の被害があった。1日矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	1	1804	10	1	尾張・三河、暴風雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。下流の碧海郡小川村(現安城市)付近でも氾濫があったもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	1	1804	10	20	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、岡崎の矢作橋東方で約90m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	4	1807	10	17	尾張、三河、暴風雨。名古屋では尾張藩主の邸宅を破損、岡崎では社寺の建物樹木など被害があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	5	1808	9	15	紀伊・東海道・関東諸国・尾張・三河、暴風雨・洪水。	
文化	6	1809	9	15	三河、暴風雨。岡崎では、土べい約120mが倒れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	8	1811	8	12	尾張、雷雨・強雨、竜巻。数日間雷雨が続き、この日名古屋城下へ多数の落雷があり、強雨が降って浸水したところもある。また熱田の沖に、竜巻が発生した(被害はなかったもよう)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	11	1814	8	14	三河、大雨・洪水。14日夜半前(22時ごろ)から、降り出した雨は強風を伴ない、翌15日の早朝には、矢作川水系が出水した。午後には青野堤・川島の大帳堤さらに各所の堤防が相ついで決壊し、夕方には人家に浸水した。雨は16日になってもやまず、矢作川水系の堤防決壊は10か所におよんだ。この方面の人家や田畑のこうむった被害は大きかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文化	12	1815	7	31	近畿・東海道諸国、大雨・洪水。31日から8月3日まで大雨が降り続き、尾張・美濃の諸川が氾濫して被害は大きかった。三河でも矢作川が氾濫した。美濃高須・八神・竹ヶ鼻付近は最も惨害をきわめた。	愛知県の気象(1961)
文化	13	1816	9	24	四国・近畿・東海道・関東諸国、暴風雨・洪水。23日夜から風雨が強くなり、24日朝(8時ごろ)から北東の風が激しくなる。家屋の被害など出はじめる。	
文政	2	1819	8	16	尾張、雷雨・落雷。連日、名古屋とその周辺に雷雨・落雷があり、特に19日には大雷雨となり、落雷によって各地に火災が発生した。(名古屋・前津、愛知県山崎村、知多郡横須賀村(30軒焼失)など)。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	4	1821	9	3	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村(現豊田市)内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
文政	5	1822	9	10	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し、拳母村内で破堤して、氾濫した。倒壊家屋25戸、死者2人、負傷者35人の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	6	1823	9	21	三河、大雨・洪水。矢作川が出水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	7	1824	8	18	三河、大雨・洪水。矢作川出水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	8	1825	5	31	三河、大雨・洪水。矢作川が増水し、碧海郡上青野村(現岡崎市)地内の本光寺西方で、堤防約180mが決壊した。青野村はもちろん、安藤・福穂・高畑・三ツ木・在家の各村が浸水して被害甚大であった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	8	1825	9	25	尾張・三河、大雨・洪水。連日の大雨で農作物に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	9	1826	6	21	尾張、暴風雨。早朝から夜(20時ごろ)まで風雨が強く、夜中から暴風雨となり、一宮の近村では樹木や家屋が倒れた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	11	1828	6	20	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、岡崎の大平橋が流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	11	1828	8	10	中部・関東・奥羽、暴風雨・洪水・凶作。矢作川は、10日の暴風雨で満水し、11日各所の堤防が決壊氾濫した。	愛知県の気象(1961)
文政	12	1829	8	17	三河、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文政	13	1830	9	3	京都・尾張、暴風雨・洪水。朝から大雨が降り、庄内川が出水して、名古屋側の左岸で、辻村の堤防が決壊し、名古屋北西部の中下・柳町付近・名古屋城下が浸水した。なお、辻村には、城内用水源としての大杣(いり)があった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	6	1835	8	29	尾張、暴風雨。高潮により、伊勢湾沿岸の新田堤防が9か所決壊して、家屋を流失し、海岸地方はドロ海となった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	7	1836	9	23	近畿・中部諸国・江戸、暴風雨・洪水。三河、暴風雨・洪水・凶作。尾張南部および尾張知多郡方面と三河全般に暴風雨の被害をこうむった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	10	1839	9		尾張・三河、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、大留村杖の口(現春日井市)で約90m破堤して、氾濫した。また渥美郡泉村(現渥美町)地内で田に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	13	1842	6	26	尾張・三河、大雨・洪水。26日、矢作川が出水し、拳母村内で破堤した。起日は不明だが、この年、木曾川の氾濫で、葉栗郡草井村(現江南市)の家屋40軒、耕宅地25haが、流失あるいは被害を受けた。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	14	1843	9	27	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村(現豊田市)内で破堤した。26日九州諸国・伊勢・江戸・暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	14	1843	10	3	東海道(美濃・尾張)・関東諸国、暴風雨・洪水。	愛知県の気象(1961)
天保	15	1844	5	25	三河、大雨・洪水。矢作川が出水して、拳母村内で破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
天保	15	1844	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡和爾良村字北御油(現春日井市)で約140m破堤し、上条村(現春日井市)地方が被害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	2	1845	9	13	尾張、暴風雨。半田の英比川堤防が決壊して氾濫し、耕地の被害が大きく、家屋の倒壊も多かった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	3	1846	8	28	大雨で庄内川が出水して、東春日井郡下津尾村安丸野(現春日井市)で、右岸堤防が約180m決壊して氾濫した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
弘化	4	1847	5	24	美濃・尾張、暴風雨。美濃・尾張では、暴風で大木が倒され、美濃では大垣などで家屋の被害も多かった。尾張でも民家の海中へふき倒されたものがあった。知多郡大高村では、全壊家屋4戸、半壊家屋1戸の被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	1	1848	6	24	三河・遠江、大雨・洪水。長雨ののち雷を伴った大雨が降り各河川が出水した。矢作川が出水して、岡崎の矢作橋が破損した。	愛知県の気象(1961)
嘉永	1	1848	9	5	伊勢・尾張、暴風雨・洪水。尾張の各河川が出水し、ところどころで破堤して氾濫し、家屋の被害もあった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	2	1849	9	17	尾張、長雨・大雨・洪水。8月から大雨が続き、田畑の浸水が甚だしく、作物はほとんど腐った。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	2	1849	9	24	三河、大雨・洪水。朝(6時ごろ)から矢作川の堤防が決壊し、民家の床下に浸水し、29日になっても水が引かなかった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	3	1850	8	28	尾張・三河に風水害があった。伊勢・美濃・尾張・三河・遠江・駿河6か国の農地被害概算は約100万石といわれる。	愛知県の気象(1961)

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
嘉永	3	1850	9	8	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。8日から13日までの間大雨が降り(12日夜から13日朝にかけては暴風雨)、その後も17日まで雨はやまなかった。このため、尾張・三河の各河川は全般に出水し、大きな水害となった。	愛知県の気象(1961)
嘉永	3	1850	10	7	尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。伊勢湾には高潮がおこり、海西郡の八穂新田の堤防が決壊して、海水が一带に浸入した。矢作川・豊川も出水しているが、水害をおこすほど、水位は高くなかったようである。	愛知県の気象(1961)
嘉永	5	1852	9	4・25	三河、暴風雨。岡崎では、9月4日夜半から5日正午ごろまで(南東の風)、9月25日10時ごろから、10月5日夜それぞれ暴風雨となった。矢作大橋は約50m破損した(どの暴風雨によるものか不明)。9月4日、四国・近畿・関東、9月25日、紀伊・安芸、10月5日、中国・近畿・江戸、暴風雨。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	5	1852	9	21	三河、大雨・洪水。矢作川が出水し(夜20時ごろ)、額田郡天白村大曲(現岡崎市)で約220m破堤した。このため、在家・三ツ木(現岡崎市)および近隣の各村は床上1m位も浸水したが、中之郷・上青野・赤湊・高橋の各村は、やや高地のため早く水が引いた。<天白切れ>	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	6	1853	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、右岸の東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約270m破堤した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	7	1854	6		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡松河戸村(現春日井市)一ツ橋で約390m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
嘉永	7	1854	9		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡神領村字海東(現春日井市)で約360m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	2	1855	9	7	尾張・三河、暴風雨(大雨)・洪水。7日朝から大雨が降り、夜に入っても降り続き、8・9日はやんだ。しかし、9日夜には再び豪雨になり、10日まで続いた。(7日と10日は暴風雨)。このため各所の堤防が決壊したが、前年の大地震後の復旧が完了していなかったため被害が大きくなった。	愛知県の気象(1961)
安政	2	1855	9	30	四国・近畿・東海諸国、暴風雨。尾張・三河、暴風雨・高潮・洪水。名古屋、30日午後から暴風雨となり、夜になって最も強くなった。夜22時ごろ伊勢湾・渥美湾に高潮がおこり、伊勢湾沿岸の新田堤防や海岸堤防91か所が決壊した(知多半島から海部郡まで)。流失家屋130軒、死者20人の被害があり、とくに甚だしかったのは堀川・庄内川の間の築地前・熱田前・稲富・永徳・神宮寺の新田であった。	愛知県の気象(1961)
安政	3	1856	8	29	尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	4	1857	6	8	美濃・尾張、大雨・洪水。各河川が氾濫した。	愛知県の気象(1961)
安政	4	1857	9	2	尾張、大雨・洪水。尾張横須賀代官管内28か村、鳴海代官管内29か村が水害をこうむった。	愛知県の気象(1961)
安政	4	1857	9	18	尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水して、東春日井郡勝川村(現春日井市)の東切野と西切野で約130m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
安政	6	1859	7		尾張、大雨・洪水。庄内川が出水して、松川戸村(現春日井市)で約370m破堤した。木曾川・佐屋川破堤のため、この二川にはさまれた輪中に大被害があった(水深3m余になる)。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万延	1	1860	6	29	美濃・尾張、暴風雨・洪水。伊勢湾に高潮がおこり、新田に被害があったが、あまり著しいものではなかった。中島郡起村(現一宮市)では、全壊家屋2戸、半壊家屋6戸の被害があり、そのほか尾張地方に建物や人の被害があったもようだが詳細は不明。尾張藩領内の被災村数は115か村、農作物被害高は12万石。三河では、矢作川水系が出水し、大平橋(現岡崎市)をはじめ橋の流失があった。また乙川の大平橋下流で浸水した。また上流の拳母村(現豊田市)内でも破堤している。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
万延	1	1860	7	29	尾張・三河、暴風雨・凶作・ききん。稲など農作物に強風が被害を与えたらしい。この年は余り強くはなかったが何度も暴風がふき農作物の収穫に影響した。	
文久	1	1861	9	24	三河、暴風雨・洪水。24日夜から暴風雨になり、25日夕方雨はあがる。矢作川支川の大平川(乙川)が出水し、大平橋が流失した。岡崎は一部住家が浸水したもよう。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
文久	1	1861	11	7	三河、大雨・洪水。7日夜大雨、8日未明(3時ごろ)矢作川は満水となり、大平川(乙川)の大平橋(仮橋)は7時ごろ流失した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM

和暦		西暦			記事(愛知県災害誌)	出典
年号	年	年	月	日		
文久	2	1862	8	19	三河・駿河、暴風雨・洪水。岡崎では、24日から雨が降り、夕方から南東の風が強くなって、終夜続く。25日朝、一部に住家の浸水がはじまり、次第に甚だしくなる。風向は南東から北、そして西にかわり、西の吹きかえしが甚だしく強かった。矢作川の水位は低かったが、菅生川の水位は格段に高かった。	
文久	3	1863	10	7	尾張、大雨・洪水。庄内川が出水し、東春日井郡勝川村字松ノ内(現春日井市)で約50m破堤した。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
元治	1	1864	8	12	三河、雷雨・落雷・竜巻。岡崎およびその周辺に多数の落雷があり(10か所余)、4人もの死者が出た。碧海郡隣勝寺村(現豊田市)付近に、竜巻が発生し、家屋を倒し、死者数人が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	1	1865	7	10	美濃・尾張・三河、大雨・洪水。庄内川が出水し、左岸の瀬古村(現名古屋守山区)・中切村(現名古屋西区)、右岸の味鏡村(現名古屋北区)・勝川村(現春日井市)で破堤して氾濫、一帯に大水害をこうむった。	愛知県の気象(1961) 愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	6	26	尾張・三河、強風雨。田植期の26日夜から27日にかけて風雨が強く、竹・木が折れる。夏作は不作となる。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	7	18	三河、暴風雨・洪水。刈谷の高須新田(猿渡川下流)が冠水し、三河の海岸地方では農作物に被害があった。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	8	10	三河、暴風雨・洪水。岡崎では、10日は雨だったが、夕方(18時ごろ)から風雨が強くなり、夜半(22時ごろ)には、川が氾濫して、一部住家に浸水した。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM
慶応	2	1866	9	14	尾張・三河、大雨・暴風雨・洪水。尾張・三河では、13日夜から15日まで大雨が降り続き、15日は夜(20時ごろ)から翌朝(7時ごろ)まで暴風雨であった。尾張では、家屋・樹木・農作物の被害が大きかった。岡崎では河川の出水により、家屋の浸水もあり、三河の農作物も大きな被害を受けた。	愛知県災害誌(1970)
慶応	3	1867	9	27	尾張、暴風雨・洪水。庄内川が出水し、松河戸村(現春日井市)八反田で破堤した。	愛知県災害誌(1970)
慶応	4	1868	5		近畿・東海道・関東地方、長雨(大雨)・洪水・凶作。尾張・三河とも、閏4月中旬から連日雨が降り続き、5月に入ってさらに甚だしくなった。このため、低地の浸水や諸川の氾濫がおこったが、ことに丹羽郡入鹿池堤防の決壊による被害は甚大であった<入鹿切れ>。この雨で、この年は凶作となる。これは、多雨型の梅雨とその末期の大雨によるものである。	愛知県災害誌(1970)
慶応	4	1868	9	16	尾張、大雨・洪水。庄内川水系が出水し、庄内川の上・中・下志段味村、ほかの各所で堤防が決壊した。矢田川でも瀬戸村・瀬古村・成願寺村・中切村・福徳寺村等で破堤して、家屋流失や死者も出た。名古屋も巾下付近で家屋の浸水が甚だしく、本町・広小路・赤塚(当時は小川や溝が多かった)も床下浸水した。また、一宮等尾張西部地方でも低地が浸水した。	愛知県災害誌(1970)

※被害実数は文献により差異があります。

災害年表(風水害) 明治時代以降

				愛知県					
和暦	西暦	開始日		気象概要	気象値			事象	出典
		年	月		日	降水量	風速等		
年	西暦	月	日	日	指標	観測局	値		
明治	10	1877	10					愛知県下全般に暴風雨。死者13人、負傷者9人、家屋全壊1,058戸、家屋半壊233戸の被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	22	1889	9	11				紀伊半島から名古屋付近を通過した台風により、三河湾・伊勢湾に高潮が起きた。熱田では11日19時頃に高潮が来襲し、豊田・柴田・笠寺・伝馬・星崎の名新田一帯が浸水した。県一般での暴風雨と沿岸での水害により、死者876人、負傷者79人、家屋全壊・倒壊7191戸、流失家屋7,132戸、浸水家屋31,730戸という被害を出した。	愛知県史別編自然_付録00-ROM
明治	25	1892	9	4			最大風速 10.1m (20分間 平均)	愛知県下全般に暴風雨。三河の渥美・宝飯・八名・額田郡で甚大な被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	27	1894	8	23				尾張西部に落雷があり、中島郡で死傷者2人、気絶者7人があった。	愛知県の気象(1961)
明治	28	1895	8	13				強い雷雨が続き、合計234ヶ所へ落雷し、死傷者4人、気絶者6人などの被害があった。	愛知県の気象(1961)
明治	29	1896	8	30	8	31	最大風速 18.8m (20分間 平均)	紀伊半島西部から若狭湾に進んだ台風により、尾張地方を中心に死者33人、負傷者63人、全壊住家2,104戸の被害が出た。海岸地方では高潮により新田に大きな被害。	災害記録日比川
明治	29	1896	9	4	9	11		長雨と集中豪雨により、矢作川以西の河川が破堤・氾濫した。愛知・東春日井・西春日井・中島・海東5郡の被害が甚大であった。	愛知県災害誌(1970)
明治	30	1897	6	16	6	17	総雨量 名古屋 762mm 名古屋 129mm 熱田 139mm	強い雷雨で、住家の全壊3棟、建物破損7棟。また大雨で名古屋市内の約1,500戸が浸水した。	愛知県災害誌(1970)
明治	30	1897	9	29				四国北部から名古屋の南を通った台風に伴い、大雨が降った。海西郡開治村(現愛西市)で佐屋川の堤防が決壊し、死傷者4人、床上浸水10,604棟の被害を出した。	災害記録日比川
明治	31	1898	8	1				集中豪雨により名古屋市内で1,658戸が浸水。	愛知県の気象(1961)

愛知県											
和暦	開始日			終了日			気象概要			事象	出典
	年	西暦	月	日	月	日	気象値				
							指標	観測局	値		
明治 35	1902	9	28				暴風雨	最大風速 13.8m (20分間 平均)		尾張西部と関東地方を相次いで北上した2つの台風により、尾張地方で強い暴風雨となった。	
明治 36	1903	7	7	9	7	9	大雨・暴風・洪水	最大風速 22.0m (20分間 平均)		土佐沖から若狭湾に進んだ台風に伴う大雨と暴風雨で、死者・行方不明者8人、負傷者39人、などの被害が出た。東春日井郡神坂村の内津川や西加茂郡孝母町・根川村の矢作川が破壊した。	
明治 37	1904	7	9	7	7	11	暴風雨・長雨	最大風速 14.8m (20分間 平均)		10日、和歌山の東方から彦根付近に進んだ台風に伴う暴風雨で、豊川・矢作川等に氾濫被害が出た。台風の通過後も雨が続き、11日には東春日井郡篠木村と高間村で庄内川が破壊し、名古屋市内の住家1,082戸、非住家110棟が浸水した。被害が大きかったのは三河地方で、死者39人はすべて東三河でのものである。	
明治 39	1906	7	10	7	7	16	大雨			大雨により庄内川・矢作川流域で、堤防決壊の被害が出た。	愛知県の気象(1961)
明治 41	1908	8	7				暴風雨・洪水	最大風速 10.6m (20分間 平均)	総雨量 名古屋 168mm	伊勢湾に入った台風の影響により、名古屋市内で床上浸水179戸、床上浸水6,379戸の住家被害が出た。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM
明治 44	1911	6	19				暴風雨	最大風速 23.1m (20分間 平均)		神戸付近から新潟に進んだ台風の暴風雨により、県下で死者65人、負傷者43人、全壊住家373戸などの被害が出た。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM
明治 44	1911	8	4				暴風雨・洪水	最大風速 14.5m (20分間 平均)		三河湾に上陸した台風の暴風雨により、東春日郡高蔵寺町ほか、西春日井郡川中村で庄内川・矢作川が破壊した。また天白川・山崎川が氾濫し右岸の愛知郡笠寺村・熱田町等で浸水した。床上浸水は、名古屋警察管内で3,671戸、熱田警察所管内で2518戸に及んだ。	
明治 45	1912	4	19				降雹・突風			丹羽郡・中島郡・海東郡を中心に激しい降雹があり、農作物に被害を与えた。降雹と同時に強い突風が起り、丹羽郡大口村から古知野村にかけて死者1人、全壊住家11棟の被害となった。	愛知県の気象(1961)
大正 1	1912	8	13				落雷			尾張地方で落雷30箇所、即死2人、家屋全焼1戸。	愛知県史別編自然-付録CD-ROM

愛知県													
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日		指 標	降水量				風速等
									観測局	値			
大正 1	1912	9	22	9	23	暴風雨・高潮	総雨量	名古屋	103mm	最大風速 28.2m (20分間 平均)	大坂湾から若狭湾へ進んだ台風に伴う暴風雨と高潮で被害が出た。「大正元年の台風」と呼ばれる。日光川が1,500mにわたって決壊破損し、海東郡南陽町、神守村、蟹江町の住宅は屋根だけを残して濁流におおわれた。	愛知県地域防災計画 木曾川町史	
大正 2	1913	10	3			暴風雨	総雨量	名古屋	78mm	最大風速 12.1m (20分間 平均)	熱田警察署管内で床上浸水912戸、床下浸水761戸、一宮警察署管内で床上浸水40戸、床下浸水1,815戸。		
大正 6	1917	7	16			落雷					東加茂郡、八名郡で落雷によって2人が死亡、住家1棟が全焼した。		
大正 6	1917	7	26			落雷・洪水					尾張で落雷、死者3人、家屋消失20戸の被害を出した。また大雨も降り、57戸で床下浸水。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM	
大正 8	1919	7	18			強雨・落雷					名古屋付近で短時間の集中豪雨で名古屋市内およびその周辺で広範囲にわたって浸水被害が発生した。	愛知県の気象(1961)	
大正 9	1920	7	27			落雷					落雷により東春日郡内で3人が死亡、家屋2戸が焼失した。		
大正 10	1921	6	30	7	1	暴風雨				最大風速 18m (20分間 平均)	梅雨前線と低気圧の影響で、県下で死者5人、負傷者10人、全壊家屋362戸、半壊家屋132戸、浸水家屋199戸の被害が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM	
大正 10	1921	7	14			大雨					雷を伴う大雨が降り、名古屋市と鳴海町を中心に2,625戸の浸水被害が出た。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM	
大正 10	1921	7	18			大雨	総雨量	名古屋	107mm		雷を伴う大雨が降り、江川と菟瀬川が氾濫した。名古屋市街を中心に9,116戸の浸水被害が出た。		
大正 10	1921	7	26	7	28	大雨・洪水					雷を伴う激しい雨で瀬戸川が増水氾濫し、瀬戸町で約700戸が浸水した。鳴海町・天白村では天白川・扇川の堤防が決壊し、床上浸水200戸、床下浸水1500戸の被害となった。	愛知県の気象(1961)	
大正 10	1921	9	25	9	26	暴風雨・高潮	総雨量	名古屋	39mm	最大風速 18.5m (20分間 平均)	紀伊半島を北上した台風の影響で暴風雨となり、伊勢湾北部に高潮が起った。海部郡から名古屋南部にかけて、高潮と日光側の氾濫による被害が甚大で、3,050haにわたり、10日～2ヶ月間も浸水した。		
大正 14	1925	8	14	8	15	大雨・洪水	総雨量	名古屋	181mm		低気圧の影響で住内川・矢作川流域に激しい雨が降った。西加茂郡拳母町などで河川が破堤氾濫し、付近一帯が浸水した。東春日郡瀬戸町でも、堤防の決壊で57戸が倒壊する被害が出た。	愛知県災害誌(1970)	

開始日				終了日				愛知県					
和暦	年	西暦	月	日	月	日	気象概要	気象値			事象	出典	
								指標	降水量				風速等
									観測局	値			
大正	14	1925	8	16	8	17	強風雨・竜巻				和歌山から舞鶴付近に進んだ台風の影響で、名古屋市で床上浸水50戸、床上浸水1,159戸などの被害が出た。また海部郡佐織村では竜巻も発生し、負傷者も出た。	愛知県災害誌(1970)	
大正	14	1925	9	11			暴風雨・洪水	総雨量 名古屋	187mm	最大風速 22.8m (20分間平均)	伊勢湾を北上し名古屋付近を通った台風により、沿岸部と平野部を中心に暴風雨となり、死者7人、行方不明5人、負傷者3人、家屋の全壊52戸、半壊16戸、浸水約2万戸の被害が出た。	愛知県災害誌(1970)	
昭和	4	1929	8	14	8	15	暴風雨	総雨量 名古屋	118mm	最大風速 17.5m (20分間平均)	大阪湾から若狭湾へ進んだ台風で、矢作川上流部に豪雨が降った。西尾町の付近で矢作川古川の堤防が大きく決壊し、1,500余戸の浸水家屋を出した。		
昭和	4	1929	9	10			大雨	総雨量 名古屋	195mm	最大風速 7.8m (20分間平均)	南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、江川警察署管内だけでも1,399戸の浸水家屋を出した。		
昭和	5	1930	7	19			大雨・洪水				台風から変わって日本海を東進した温帯低気圧の影響で、庄内川の中流や上流域の高地に短時間に激しい雨が降った。東春日井郡高蔵寺町で内津用水が氾濫し、死者7人、重傷者2人を出した。このほか東春日井郡を中心に、西春日井郡、丹羽郡方面で大きな水害となった。		
昭和	5	1930	7	23			落雷・洪水				飛騨川、長良川ぞいに南下した雷雲が名古屋市北部に達し、尾張北部の落雷は100余件に上った。雷鳴とともに豪雨となり、名古屋市内だけでも数千戸が浸水した。	愛知県の気象(1961)	
昭和	6	1931	10	13			大雨・洪水				室戸岬から名古屋付近を通過した台風に伴う大雨で、東春日井郡味岡村の入居用水から出る葉師川が氾濫するなどして、尾張西部と北部を中心に、多数の浸水家屋を出した。		
昭和	7	1932	7	8			大雨				低気圧と前線の影響で、庄内川や日光川流域で激しい雨が降り、名古屋をはじめ各所で多くの浸水被害が出た。庄内川流域では堤防、橋などが破壊決壊する大きな被害が生じた。		
昭和	7	1932	9	13	9	16	長雨				9月初旬からの長雨に驟雨性の豪雨が重なり、名古屋市内だけでも約2,000戸の浸水家屋を出した。		
昭和	8	1933	8	24			落雷・洪水				尾張平野とその周辺一帯に激しい雷雨があり、一宮市で浸水家屋2,000余戸を出した。東春日井郡では住家の全壊と半壊の被害が各1件発生した。		

愛知県											
和暦	開始日			終了日			気象概要			事象	出典
	年	西暦	月	日	月	日	気象値				
							指標	観測局	値		
昭和8	1933	9	14							名古屋地方で大雷雨となり、床上浸水80戸、床下浸水6,380戸の被害が出た。	
昭和9	1934	9	8	9	9		総雨量	名古屋	31mm	最大風速 15.8m (20分間 平均)	台風から変わって日本海を北上した温帯低気圧に伴う強風で、風に飛ばされたり、飛来物にあたるなどして、死者2人、負傷者1人を出した。
昭和9	1934	9	21				総雨量	名古屋	24mm	最大風速 32.9m (20分平 均)	室戸岬から富山湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋署管内だけでも死者4人、負傷者51人の被害が出た。河川の出水による被害は少なかったが、海岸地方では高潮の被害が出た。
昭和9	1934	11	1								猛烈な雨で、江川署管内116戸、笹島署管内697戸、熱田署管内280戸の浸水被害が出た。
昭和10	1935	10	27								低気圧の影響で豪雨となり、名古屋市全体で1万戸以上が浸水した。天白村では天白川への転落行方不明者1人を出した。
昭和11	1936	10	2	10	3		総雨量	名古屋	198mm	最大風速 18.6m	南海上を進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋市内だけでも12,686戸の浸水家屋を出した。
昭和12	1936	7	13	7	15						梅雨前線が活発化した豪雨の影響で、一宮市で5,000戸の浸水家屋を出したのをはじめ、多くの浸水被害が発生した。
昭和12	1937	9	11							最大風速 26.7m	足摺岬から鳥取沖へ進んだ台風の影響で風雨が強まり、名古屋市内で飛散物による死者2名が出た。
昭和13	1938	7	3	7	5						低気圧が通るたびに梅雨前線が活発になって豪雨が続き、名古屋市内で3,409戸の浸水家屋を出した。
昭和14	1939	8	7								名古屋付近で大雷雨があり、市内で4,561戸が浸水した。
昭和15	1940	6	16	6	17		総雨量	名古屋	192mm		千天の大雨で庄内川が大増水し、名古屋市内で1,600余戸の家屋が浸水した。
昭和16	1941	6	27	6	29						梅雨前線の長雨が激しい雨となり、山間部でがけ崩れ、平野部で河川の氾濫、堤防の決壊などの大きな被害が出た。名古屋市内で床下浸水家屋2,000余戸、西加茂郡で重要道路通行不能。
昭和16	1941	7	10	7	12						太平洋洋面に発生した前線が活発化し、庄内川上中流域に激しい雨が降った。名古屋市内で死者3人、浸水家屋1,100棟の被害が出た。
昭和19	1944	10	7	10	8		総雨量	名古屋	80mm	最大風速 21.7m	伊勢湾から名古屋付近に上陸した台風の影響で、濃尾平野はかなりの被害を受けた模様であるが、資料不足のため詳細不明。

愛知県												
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典
	年	西暦	月	日	月	日		降水量		風速等		
								指標	観測局			
昭和20	1945	9	18				台風第16号 (枕崎台風)	総雨量 名古屋	40mm	最大風速 29.7m	猛烈な台風の影響で20m以上の暴風となり、急造のパラックが多数倒壊し、死者も4人あった。	
昭和20	1945	10	5				台風第19号	総雨量 名古屋	217mm	最大風速 14.7m	紀伊半島をかすめて東海道沖を東進した台風の雨雲の影響で、広範囲に水害が発生した。	
昭和20	1945	10	11				台風第20号 (阿久根台風)	総雨量 名古屋	229mm	最大風速 18.3m	台風に刺激された前線の影響で大雨が降り、水害が発生した。	
昭和23	1948	11	19				台風第34号	総雨量 名古屋	21mm	最大風速 15.4m	東海道沖を海岸沿いに進んだ台風により、風水害を生じた。	
昭和24	1949	8	31	9	1		台風第10号				八丈島方面から小田原の西に上陸した台風の大雨で、名古屋市内と中島郡方面を中心に浸水の被害を出した。	
昭和25	1950	7	28	7	30		台風第9号・ 熱帯低気圧				九州の南海上で停滞した台風と熱帯低気圧に伴う大雨の影響で、1,600余戸の浸水被害が出た。	愛知県災害誌(1970)
昭和25	1950	9	3				台風第28号 (シエーン台風)	総雨量 名古屋	47mm	最大風速 26.7m/s (10分平均) 最大瞬間風速 36.0m	室戸岬から若狭湾に進んだ台風に伴う暴風で、名古屋市、一宮市、西加茂郡で計6人の死者を出した。	愛知県災害誌(1970)
昭和27	1952	6	23	6	24		台風第2号	総雨量 名古屋	177mm	最大風速 15.6m	紀伊半島南端に上陸し渥美半島に進んだ台風と、それに刺激された梅雨前線の影響で、東海道地方全域に大雨が降り、長良川下流域で堤防が決壊して大災害となった。	
昭和27	1952	7	10	7	11		豪雨・洪水				前線の活動が活発になり、庄内川中流域から名古屋にかけて大雨が降った。名古屋近郊の天白川、山崎川が増水氾濫し、名古屋市で床上浸水2,353戸、床下浸水38,757戸の被害となった。	
昭和28	1953	7	17	7	20		大雨				日本海から延びた前線の通過に伴い局地的に豪雨が降り、名古屋市で1,500余戸の浸水被害が出た。	愛知県災害誌(1970)

開始日					終了日			愛知県					
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	気象概要		事象		出典	
								指標	観測局	値	風速等		
昭和	28	1953	9	25				総雨量	名古屋	178mm	最大風速 22.6m/s (10分平均) 最大瞬間 風速 30.4m 最高潮位 2.27m	熊野灘から知多半島に進んだ台風により県下全体で暴風となった。大潮の時期に高潮が重なり、暴風による波浪とともに海岸堤防を破壊し被害が大きくなった。名古屋市をはじめとして6市26町76村に災害救助法が適用された。	愛知県災害誌(1970)
昭和	29	1954	7	30								飛騨川下流域から南下した雷雲が名古屋市北西部に達し、移動経路上で短時間の豪雨を降らせた。名古屋市の北部、西部の限られた狭い地域で5,000戸を超える家屋が浸水した。	
昭和	29	1954	8	31	1							数多くの雷が発生し、入鹿池周辺や中島郡、海部郡、名古屋市などに大雨を降らせた。尾張西部を中心に床上浸水289戸、床下浸水11,730戸の被害が出た。	
昭和	29	1954	9	18	9	19		総雨量	名古屋	91mm	最大風速 18.7m	紀伊半島南端をかすめ御前崎に上陸した台風に伴う暴風雨で死者4人の被害が出た。	
昭和	29	1954	9	25	9	26		総雨量	名古屋	115mm	最大風速 31.8m	台風が刺激された本州南岸の前線が、名古屋付近から知多半島にかけて激しい雨を降らせ、名古屋市で5人の負傷者、3,448戸の浸水家屋が出た。	
昭和	30	1955	10	20				総雨量	名古屋	34mm	最大風速 32.0m	田辺付近に上陸し、強い勢力を保ったまま名古屋と岐阜の間に進んだ台風の暴風で、74戸の家屋が全半壊した。これに伴う死者3人、負傷者18人という被害が、名古屋市を中心に出了た。	
昭和	31	1956	7	7								寒冷前線の通過に伴う強い雨で、名古屋市を中心に浸水被害が発生した。	
昭和	31	1956	9	26	9	27		総雨量	名古屋	136mm	最大風速 20.0m	潮岬から東海道沖を通過して御前崎に上陸した台風により、名古屋市で全半壊家屋4戸、浸水家屋3,559戸の被害が出た。	
昭和	32	1957	8	7	8	8						名古屋から多治見の狭い地域に短時間の集中豪雨があり、庄内川が増水、付近の小河川や池が氾濫した。瀬戸市、高蔵寺町を中心に死者33人、負傷者44人、全壊家屋76戸、床下浸水23,961戸という被害となった。	愛知県災害誌(1970)
昭和	33	1958	8	25	8	26		総雨量	名古屋	140mm	最大風速 24.1m	和歌山県白浜付近から琵琶湖西岸を通過した台風により、各地で浸水被害が起きた。	下山村史資料編I

愛知県										
和暦	年	西暦	開始日			終了日			気象概要	出典
			日	月	日	日	月	日		
			気象値							
指 標		観測局		値		風速等		事 象		
総雨量	名古屋	234mm	岐阜県養 老町 牧田川決 壊 最大風速 17.7m							
昭和	34	1959	8	12	8	14	大雨	太平洋岸の前線と北上する台風第7号の影響で大雨が降り、負傷者1人、家屋全半壊25戸、床上浸水14戸、床下浸水8,826戸の被害が出た。		
昭和	34	1959	9	26			台風第15号 (伊勢湾台 風)	潮岬から高山湾に進んだ台風によって猛烈な暴風雨となった。また高潮による異常潮位が伊勢湾奥で基準面上4mに達した。急激な洪水波と高潮で、木曾川、庄内川、矢作川などが破堤し、死者3,280人、負傷者59,045人、住家全壊23,334戸、住家半壊97,049戸、流失家屋3,194戸、浸水家屋10万戸以上という未曾有の被害を出した。	愛知県災害誌(1970)	
昭和	35	1960	8	11	8	13	台風第11号 、第12号	相次いで室戸岬から日本海へ進んだ台風の影響で、海部郡立田村で長良川が氾濫し1戸が流失した。また名古屋市北区で突風が吹き1戸が倒壊した。		
昭和	36	1961	6	24	6	27	大雨・洪水	梅雨前線が北上し、熱帯低気圧の影響もあって激しい雨が降り、伊勢湾台風以来の大きな水害となった。尾張西部ではほとんどの小河川が氾濫し、名古屋でも約3,000戸が床上浸水した。	災害記録目比川	
昭和	36	1961	9	15	9	16	台風第18号 (第2室戸台 風)	室戸岬に上陸し若狭湾に進んだ台風の暴風雨で、飛散物や倒壊物による多数の負傷者が出た。知多郡大府町内に竜巻が発生し、愛知郡豊明方面で消滅した。この竜巻で8工場が倒壊、14人が重軽傷を負い、家屋120戸が破損した。また尾張平野の北部や西部で小河川が溢水、破堤して浸水被害が発生した。		
昭和	37	1962	7	2	7	5	大雨・洪水	北上し活発化した梅雨前線の影響で名古屋方面で大雨となり、千種区の松野池の堤防が決壊するなどした。尾張地方で全壊1戸、半壊1戸、床上浸水892戸、床下浸水13,182戸の被害が出た。		
昭和	37	1962	7	27	7	28	台風第7号	潮岬西方に上陸し衰弱しながら伊吹山方面に進んだ台風の影響で大雨が降り、名古屋南部に浸水被害が発生した。		
昭和	37	1962	8	26	8	27	台風第14号	尾鷲付近に上陸し北上した台風の暴風で、家屋が倒壊し負傷者も発生した。また名古屋方面で浸水家屋が発生した。		

愛知県														
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典		
	年	西暦	月	日	月	日		指標	降水量				風速等	
									観測局	値				
昭和39	1964	8	3				落雷・洪水・突風					炎天と上空の寒気の影響で猛烈な雷雨が発生した。名古屋市中区では、中心部で地下街へ浸水したのをはじめ、床上浸水265戸、床下浸水9,814戸の被害が出た。また中区や千種区での落雷により、全焼家屋3棟、半焼家屋2棟の被害、海部郡蟹江町では突風により家屋が倒れて負傷者1名が出た。		
昭和40	1965	5	27				台風第6号					東海道沖を込んだ台風が前線の活動を強め、強い雨が降って名古屋市中および周辺地域に浸水被害が発生した。		
昭和40	1965	9	17				台風第24号	総雨量	名古屋	最大風速 27.0m	189mm		志摩半島尖端に上陸し伊良湖岬に進んだ台風と前線による大雨で、名古屋市などで多くの浸水家屋が発生した。	
昭和41	1966	9	19				大雨						台風第21号から変わった低気圧が停滯前線上を進んだ影響で、名古屋付近から矢作川流域にかけて強い雨が降り、名古屋市内で家屋浸水約1,600戸の被害があった。	
昭和42	1967	7	2	7	3		大雨	総雨量	名古屋		83mm		梅雨前線上を東進した低気圧の影響で雨が強くなり、小牧市の台瀬川右岸堤防が約1m崩壊し決壊寸前となった。名古屋市と庭郡で床上浸水3戸、床下浸水1,200戸の被害が出た。	
昭和42	1967	7	9	7	10		大雨						台風第7号から変わった温帯低気圧が前線を活発化させ、雷を伴った強雨となった。小河川の氾濫や排水不良のため、主に尾張地方で16,000棟を超える住家浸水があった。また中央線高蔵寺一定光寺間で山側のコンクリート壁が崩れて線路を埋めたところにも普通電車が衝突し19名が負傷した。	
昭和42	1967	10	28				台風第34号	総雨量	名古屋	最大風速 20.8m	146mm		志摩半島の先端をかすめて渥美湾に上陸した台風に伴う大雨で、名古屋市では南区を中心に18,000戸の住家浸水があった。	
昭和43	1968	8	29				台風第10号			最大風速 18.2m			台風の前線で前線が活発になり長雨が降った。台風本体の雨は主に三河地方北東部に降ったが、名古屋市周辺でも約2,000戸の住家浸水があった。	
昭和45	1970	6	14	6	16		大雨	総雨量	名古屋	最大風速 11.3m	179mm		九州の西で発達した低気圧が梅雨前線を活発化させて大雨を降らせ、名古屋市中およびその周辺市町村での住家浸水を主とする災害となった。	
昭和45	1970	7	29	7	30		集中豪雨	総雨量	名古屋	最大風速 11.3m	124mm		九州の南海上で台風6号となった熱帯低気圧の影響で、名古屋市東南部での集中的な大雨となった。天白川水系が氾濫するなどして、約4万棟の浸水家屋が生じ、昭和区、緑区内ではがけ崩れのため2人が死亡した。	

開始日					終了日			気象概要	気象値			事象	出典
和暦	年	西暦	月	日	月	日	日		降水量		風速等		
									指標	観測局			
昭和	46	1971	7	18								日本海と太平洋の2つの前線の影響で強い雷雨となった。春日井市内で落雷による死者2人、名古屋市内で2,318棟の浸水被害が出た。	
昭和	46	1971	8	30	8	31		総雨量 名古屋 322mm 大沼 464mm	最大風速 19.5m		速度が遅く、強雨域の広い台風の影響で記録的な大雨となった。土砂崩れにより豊田市で死者2人、名古屋市内で3万戸を超える浸水被害となった。		
昭和	46	1971	9	7								台風が秋雨前線を刺激して大雨となった。	
昭和	46	1971	9	26								時速70kmの速さで北上し紀伊半島から名古屋市の南海上を通り抜けた台風が、短時間に強い雨を降らせ、名古屋市内およびその周辺市町村での住家浸水が発生させた。	
昭和	47	1972	7	10	7	15		総雨量 猿投 458mm				東海地方に停滞した梅雨前線の活動が活発で強い雨が長く続いた。とくに西三河の山間部において記録的な集中豪雨となり、各地で山崩れや河川の氾濫が発生し、埋没・倒壊・流出する家屋が続出した。西加茂郡小原村、藤岡村、豊田市などで死者68人の被害を出した。前線の活動が一服した後の台風通過に伴う大雨被害とあわせて、住家の全壊271棟、半壊287棟、床上浸水2,075棟、床下浸水12,077棟という被害となった。	愛知県災害誌(1980)
昭和	47	1972	9	16	9	17			最高潮位 2.7m			紀伊半島を縦断して米原付近に進んだ台風の前線の影響も加わって、風雨が強まり高潮も発生した。名古屋市内などで飛来物による死者2人、負傷者106人、住家の半壊795棟にのぼった。	
昭和	48	1973	8	4	8	5		小牧(名古屋航空測候所) 総雨量 194mm				飛騨川流域から南下した雷雲が小牧付近で発達し名古屋市から北東へ進んだ。激しい雷雨により名古屋市内の地下鉄がマヒしたほか、名古屋市内およびその周辺市町村に5万戸以上の住家浸水が発生した。	
昭和	49	1974	7	24	7	25		総雨量 名古屋 140mm				動きの遅い低気圧に伴う大雨の影響で、名古屋市内およびその周辺市町村に約5万戸の住家浸水が発生した。	愛知県災害誌(1980)
昭和	50	1975	7	3	7	4		総雨量 春日井 142mm				四国南岸から東海道へ前線を進んだ低気圧の影響で強い雨が降り、瀬戸市内で崖崩れが多発して、負傷者4人を出した。濃尾平野南部でも多数の浸水被害が発生した。	
昭和	51	1976	7	28				総雨量 坂下 78mm				寒冷前線の雷雨で、落雷による住家の全壊1世帯、名古屋市内と東海市で床上浸水95世帯、床下浸水4,400世帯の被害が発生した。	

開始日				終了日			気象概要	気象値			事象	出典
和暦	年	西暦	月	日	月	日		降水量		風速等		
								指標	観測局			
							総雨量	名古屋	58mm			
							総雨量	一宮	682mm			
昭和	51	1976	9	8	9	13	総雨量	蟹江	642mm			
							総雨量	小牧	523mm			
							総雨量	名古屋	423mm			
昭和	52	1977	8	16	8	18	総雨量	一宮	140mm			
昭和	53	1978	9	16			総雨量	一宮	91mm			
昭和	54	1979	9	24	9	25						
昭和	55	1980	7	7	7	10	総雨量	東海	137mm			
昭和	55	1980	8	26	8	27	総雨量	中(名古屋市)	174mm			
昭和	57	1982	8	7	8	8						
昭和	58	1983	7	8								
昭和	58	1983	9	27	9	29	総雨量	名古屋	234mm			
昭和	62	1987	9	25								
昭和	62	1987	10	16	10	17						

停滯前線と東シナ海をゆっくりと北上し、北上市上した台風から延びた雨雲の影響で、西濃山地や鈴鹿山脈の東側が強い集中豪雨域となり、1週間に年間雨量の約1/3の雨が降った。県西部で中小河川が氾濫し、日光川支流の目比川右岸が破堤するなどして、10万戸以上の浸水被害が出た。海部郡佐織町では1週間近くも浸水状態が続いた。また名古屋市中川区・海部郡大治町では突風による家屋倒壊の被害もあった。

前線と弱い熱帯低気圧の影響で大雨が降り、県西部地域で家屋の半壊1棟、床上浸水、床下浸水などの住家被害を発生させた。

台風第18号から変わった弱い熱帯低気圧の影響で強い雨が降り、名古屋のほか県西部域の22市町で家屋の床上および床下浸水が発生した。

南岸沿いの前線と台風16号の影響で、局地的に短時間の強い雨が降り、名古屋、東海市、豊明市などで床上・床下浸水の被害が発生した。

活発化した前線を通して低気圧の影響で強い雷雨となり、名古屋市北区、中区、昭和区、東区を中心に約1,000世帯の床上、床下浸水被害が出た。

日本海の低気圧から延びた前線の通過に伴い、名古屋で局地的集中豪雨となった。名古屋では、中川区、熱田区、港区を中心に、床上浸水413戸、床下浸水13,028戸の被害となった。

上空の寒気の影響で激しい雷雨となり、名古屋市を中心とした尾張地方各地で、床上浸水、床下浸水が多発した。

日本海と南岸を東進した低気圧の上空に流れ込んだ寒気の影響で、名古屋市東部と春日井市を中心に大雨となり、床上浸水41棟、床下浸水1,053棟が発生した。

台風10号から変わった熱帯低気圧が四国南岸から本州の南を東進した影響で、名古屋を中心とする県西部で集中的な豪雨となり、死者5人をはじめ大きな被害が出た。

九州の南から本州南岸を東進した低気圧の影響で、名古屋を中心に雷を伴った激しい雨となり、名古屋市で床上浸水127棟、床下浸水2,380棟の住家被害があった。

台風19号では死者1人、負傷者1人、いずれも東三河。

愛知県

愛知県災害誌(1980)

愛知県													
和暦	開始日			終了日			気象概要	気象値			事象	出典	
	年	西暦	月	日	月	日		指標	降水量				風速等
									観測局	値			
昭和63	1988	8	24				大雨				気圧の谷の通過に伴う寒気の影響で、県内のほぼ全域で雷雨となり、県西部を中心に住家の浸水被害が多く出た。		
昭和63	1988	9	20				大雨				本州上を東進した低気圧に湿った空気が流れ込んだ影響で、県西部を中心に短時間に激しい雨が降り、多くの住家の浸水被害を出した。		
平成2	1990	9	17	9	18		大雨	総雨量 東海	276mm		台風19号からの暖気の流入で秋雨前線が活発化しながら近づき、県下全域で大雨が降り、とくに尾張、知多地方で強い雨に伴う浸水被害が多く発生した。		
平成2	1990	9	19	9	20		台風19号				大型で強い勢力の台風が和歌山県白浜から愛知県内を進み、暴風雨となった。県西部では負傷者5人、住家の半壊2棟などの被害が出た。		
平成2	1990	11	30	12	1		台風第28号				和歌山県白浜町に上陸し岐阜県北部へ進んだ台風で県内は暴風雨となり、県西部で床上浸水30棟、床下浸水1,033棟の被害となった。人的被害はなかった。		
平成3	1991	9	18	9	19		台風第18号	日雨量 名古屋	218mm		沖繩の東から隼子沖に高進した台風に伴い、南岸の秋雨前線が活発化した。太平洋側各地で記録的な大雨となり、名古屋市や春日井市で床上浸水1,846棟、床下浸水7,351棟などの被害が出た。		
平成6	1994	7		8			干害				死者・行方不明者8人。	愛知県史別編自然_付録CD-ROM	
平成6	1994	9	17	9	18		大雨				上空に寒気を伴った低気圧が停滞した影響で、激しい雷雨となり、名古屋市はじめ36市町で床上浸水、床下浸水計6,048棟が発生した。		
平成10	1998	9	21	9	23		台風第7・8号			最大風速 42.6m	和歌山県西部に上陸した台風8号により激しい雨となり、続いて上陸した台風7号が愛知県西方を通ったことから暴風雨となった。名古屋市と一宮市で死者3人、県西部地方を中心に重軽傷者151人などの被害が出た。	愛知県地域防災計画	
平成12	2000	9	11	9	12		大雨	総雨量 東海	589mm		秋雨前線に台風第14号の影響が加わって、非常に激しい雨が降り、死者7人、重軽傷者107人の被害を出した。	愛知県地域防災計画	
平成16	2004	9	4	9	5		大雨	総雨量 名古屋	567mm		日本海の停滞前線に暖湿気流が流れ込んだ影響で、名古屋市付近で短時間に局地的な大雨が降り、床上浸水250棟、床下浸水1,584棟の被害を出した。		
平成20	2008	8	28	8	30		8月末豪雨	日雨量 名古屋	136mm		名古屋市で住家の損壊8棟、床上浸水1,175棟、床下浸水9,929棟の被害が出た。一宮市では軽傷者1人もあった。	愛知県の災害の記録 平成20年(2009)	

愛知県												
和暦	年	西暦	開始日		終了日	気象概要	気象値			事象	出典	
			年	月			日	月	日			降水量
指標	値	指標	観測局	値	指標	観測局	値	指標	観測局	値		
平成	21	2009	10	8		台風第18号	総雨量	東海	206mm		強い勢力を維持したまま多半島に上陸した台風の影響で、非常に強い風が吹いた。重軽傷者19人、住家の全半壊47棟、一部破損2,092棟、床上浸水246棟、床下浸水1,235棟の被害となった。	愛知県地域防災計画

※被害実数は文献により差異があります。

土地分類基本調査（土地履歴調査）
説明書

豊 田

5 万分の 1

平成 2 4 年 3 月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省
ホームページからご利用いただけます。